

大学における一般教育の英語に関する調査研究 —長野大学を中心に—(その1)

A Survey of English Language Teaching in General Education Course of University

船山良一 小川勝一 岩崎正也
Ryoichi Funayama Syoichi Ogawa Masaya Iwasaki

はじめに

本論文は、1989年に長野大学生を対象として実施した「大学一般教育の英語に関するアンケート」についての調査研究(その1)である。ここでは、①アンケート調査の趣旨・概要、調査対象の基本的属性および進学の動機について(執筆分担 小川勝一)、②「英語再履修生」問題について(執筆分担 船山良一)の検討を行う。続いて発表を予定している「調査研究(その2)」において、大学における英語教育の履修状況、大学生生活の全般的状況などについての検討を行うこととする。

I) 調査の趣旨・項目の概要および 調査対象について

(小川 勝一)

1. 調査の趣旨・項目の概要

本学では、単位未修得者の増大や、学習意欲に欠ける学生の指導などいくつかの困難をかかえている。しかし、学生の実態に関する資料に関しては必ずしも十分整備されているとはいえず、いわんや、教員による教授方法に関する組織的な研究も、まだ行われていないのが実状であるといつてよい。本調査は、学生の大学における学習への取り組みを考える重要な指標である英語教育の実態について、中学生以来の英語学習への態度、また、大学生生活全般の中での位置を経時的・共時的に関連づけながら明らかにしようとするものであり、今後の本学英語教育の改善および大学教育について検討を進めるための一つの基礎的資料としようとするものである。調査の基本的項目は、「大学『一般英語』実態調査研究会」(註1)が行ったものに準拠し、また、本学で行われたいくつかの調査も活用した。(註2)

調査項目は次のように構成されている(調査票については後掲)

- ①調査対象の基本的属性
- ②出身高校と大学進学 of 動機
- ③中学時代の英語教育の状況と中学時代の生活
- ④高校時代の英語教育の状況と高校時代の生活
- ⑤大学における英語教育
- ⑥英語の単位未修得の状況
- ⑦大学生生活の全般的状況

調査方法と調査時期

1989年7月

英語の授業時間を使って、調査票を配布し、実施。その場で回収した。英語再履修者については、一部個別に調査票を配布し、回収した。

2. 調査対象の基本的属性について

①学科別男女比・学年構成比

合計で378名を調査対象としている。表1にみるように、89年度の各学科の男女構成とほぼ対応している。また、調査対象は本学の英語教育を1年以上経験しているものと言うことで、2年生以上とした。その結果、情報学科は開設2年目のため、対象は2年生のみということになった。(表2)

②出身高校の進学率・試験別構成比

出身高校の進学率は表3の通りである。表中、「学生調査」とあるのは、89年に長野大学生740名を対象として実施された「学生生活実態調査」である。(以下、同じ。実態調査の結果については、長野大学学生委員会・学生課『1989年度学生生活実態調査報告書』1990)

本調査の傾向と「学生調査」はほぼ対応している。進学率9割以上のいわゆる進学校の出身者が少ないこと、職業高校の出身者が1割程度いることが、本学の学生の出身校の一つの特色である。

(表1) 学科別男女数・構成比率

	男子 数(比率)	女子 数(比率)	数(比率)
産社	144(91.7) (92.3)	13(8.3) (7.7)	157(41.5)
情報	73(88.0) (91.7)	10(12.0) (8.3)	83(22.0)
福祉	68(49.3) (54.8)	70(50.7) (45.2)	138(36.5)
合計	285(75.4)	93(24.6)	378

(下段は 年度の各学科男女構成)

(表3) 出身高校の進学率

	本調査	学生調査
4割以下	27.1	29.1
4～9割	42.7	42.9
9割以上	20.4	18.8
職業科	8.2	8.3
その他	1.6	1.2

③ 現役・浪人別構成比別

現役と浪人の構成比は、8対2で、学生調査とほぼ同様の構成比率である。

ちなみに、87年に実施された学生生活実態調査では現役・浪人の比率は9対1になっている。

(表5) 現役・浪人別構成比別

	本調査	学生調査	87調査
現役	82.8	79.5	90.0
浪人	17.2	21.5	10.0

3. 大学進学希望と動機について

本学を当初の希望(第一希望)としたものは、30%から50%弱である。ただし、英語の単位が未修得で、再履修となった学生(Sと略称、以下同じ)と修得できた学生(Nと略称、以下同じ)によって異ったかたちで差がでている。(表6)

しかし、情報と福祉の第一希望でなかった者の

試験別の比較では、(表4)に見る通り、本調査は「学生調査」より推薦試験による入学者がやや少なくなっている。

(表2) 学科別学年構成比率

	2年	3年	4年	過年度
産社	28.7	27.4	35.7	8.3
情報	98.8			
福祉	43.5	29.7	24.6	2.2

(表4) 試験別構成比

	本調査	学生調査
推薦	39.3	47.2
試験1次	45.6	41.5
試験2次	14.6	11.4

場合だが、当初の希望が「他大学・他学部」だったという、いわば、希望から遠かった者の方が、再履修者の比率が高くなっている。(表7)

(表6) 長野大学はあなたの当初の希望の学校ですか(問9)

はい	産社	36.9 (N 36.0)	S 37.8)
	情報	30.1 (N 32.8)	S 18.8)
	福祉	48.6 (N 45.7)	S 54.9)

(表7) 第一希望の大学 当初の希望(第一希望の大学)(問10)

他大学同一	産社	11.3 (N 11.4)	S 11.3)
学部・学科	情報	6.9 (N 8.9)	S 0.0)
	福祉	63.0 (N 70.2)	S 37.5)
他大学他学部	産社	81.4 (N 81.8)	S 81.1)
・他学科	情報	91.4 (N 88.9)	S100.0)
	福祉	35.6 (N 28.1)	S 62.5)

大学進学動機(問11)に関して、進学を決める際に考慮した要因を14項目について質問している。結果は、同趣旨の質問を行った他調査と同様になっている。(註3)

すなわち、14項目の関係を因子分析によって検討すると「興味・関心」や「将来の人生計画」など目的意識に関わる項目が抽出されている。これは強く考慮されている要因であるが、福祉学科で特にその傾向が顕著である。ついで、「自由な時間」や「安定した地位」のやや一般的な進路選択意識の項目群、「家庭の勧め」や「先生の勧め」の周囲の意見に関する項目群があげられている。「成績」については考慮される程度の高い要因だが、これらの因子とは関連を持たない特別な項目になっている。

一方、「学生調査」によると本大学に入学した理由として高率であげられているのは「志望した大学に入学できない」(37.2%)、「本大学で学びたいことがある」(23.6%)である。「志望した大学に進学できなかった」者は、推薦入試で入学した者の場合でも22.3%と高率になっている。これを見ると、興味・関心と並んで、強く考慮されている「成績」の要因は、結果として試験の成績によって、「志望した大学に進学できない」という状況の中での、「成績」への考慮であり、たいへん強制力の強いものであると考えられる。産社や情報学科の場合、第一希望でない者が7割前後いるが、(表7)にみるように、その8、9割は、第一希望は「他大学・他学部」であったと答えている。ここにも余儀ない選択という結果が反映して(表10)長野大学に入学した理由

いる。

こうして本学の場合、①成績に規定された選択の背景にある諸要因、②とりわけ、高校までの学習の特徴、そして、入学後の学習との関連について、③また、いわゆる不本意入学者の入学後の実態や大学教育の果たしている役割などについて、たちいった分析と検討が格段に求められている。本論文では、英語教育に即して、再履修生に焦点をあてて検討をおこなうが、再履修問題を切口として、そうした問題に答えようとする一つの試みであるといつてよいだろう。

(表9) 進学に際して考慮した事柄(問11)

①自分の成績	67.7(%)
②自分の興味・関心	68.0
③自分の性格や向き不向き	37.9
④資格をとること	34.2
⑤家庭の経済力	38.7
⑥専門知識を身につける	52.4
⑦教養を身につける	43.7
⑧自由な時間が得られる	52.9
⑨安定した地位を得る	42.4
⑩周りの皆がいくから	9.7
⑪自分の将来の人生計画・目標	55.5
⑫家庭の勧め	24.8
⑬先生の勧め	15.9
⑭生涯打ち込むものを見つけるため	40.4

(たいへんよく考えたを5、全く考えないを1として、5選択肢とし、1項目選択。調査票参照。比率は4.5を選んだ者の構成比率である)

第1因子 2, 3, 4, 6, 7, 11, 14, 第3因子 8, 9
第2因子 12, 13

	産業社会	社会福祉	産業情報	計	推 薦	試 一 次	試 二 次	計
本大学で学びたいことがある	28 (10.2)	115 (38.6)	32 (18.9)	175 (23.6)	110 (31.5)	52 (16.9)	12 (14.3)	174 (23.5)
資格を得る	22 (8.0)	45 (15.1)	6 (3.6)	73 (9.9)	41 (11.7)	26 (8.5)	6 (7.1)	73 (9.9)
環境や雰囲気	37 (13.5)	21 (7.0)	17 (10.1)	75 (10.1)	44 (12.6)	29 (9.4)	2 (2.4)	75 (10.1)
志望した大学に入学できない	119 (43.4)	83 (27.9)	74 (43.8)	276 (37.2)	78 (22.3)	147 (47.9)	51 (60.7)	276 (37.3)
社会に出るのがいや	15 (5.5)	5 (1.7)	7 (4.1)	27 (3.6)	17 (4.9)	7 (2.3)	3 (3.6)	27 (3.6)
もう少し遊びたい	27 (9.9)	9 (3.0)	13 (7.7)	49 (6.6)	22 (6.3)	22 (7.2)	5 (6.0)	49 (6.6)
まわりのみんなが行く	3 (1.1)	4 (1.3)	1 (0.6)	8 (1.1)	4 (1.1)	2 (0.7)	2 (2.4)	8 (1.1)
その他	23 (8.4)	16 (5.4)	19 (11.2)	58 (7.8)	33 (9.5)	22 (7.2)	3 (3.6)	58 (7.8)
計	274 (37.0)	298 (40.2)	169 (22.8)	741 (100.0)	349 (47.2)	307 (41.5)	84 (11.4)	740 (100.0)

(註)1. 大学「一般英語」教育実態調査研究会、『大学教育に関する実態と将来像の総合的研究(II)一学生の立場』1985
2. 小川勝一、「大学生の進路選択の諸問題」、『長野大学紀要』第10巻第3号、1989
3. 小川、同上

II) 「英語再履習生」問題について

(船山 良一)

はじめに

今回の共同研究「長野大学一般教育の英語に関する調査」の中で、本稿は「英語再履習生」問題に焦点をあて、それを中学校、高等学校、大学の接続関係において捉えることを担当する。長野大学で英語の単位の修得に失敗し再履習する学生が、近年はやや減少しつつあるもののこれまで相当数存在しており、その対策に我々英語の教員が苦勞してきたというのが偽らざる事実である。本稿の意図は、本次の共同研究を通じてこの英語再履習

生問題の実態とその発生のメカニズムのいくばくかを解明し、今後の取り組みに活かしたいとするところにある。その際に、大学「一般英語」教育実態調査研究会による『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(Ⅱ)―学生の立場』(註1)を全国的な傾向を示すものとして常に念頭に置きつつ分析をすすめてゆく。今回実施したアンケートの中で本稿が主に対象とするのは、Ⅲ 中学時代について、Ⅳ 高校時代について、Ⅷ 再履習生についてである。

各論に入る前に本調査の回答者の内訳を掲げておく。

男女別学科別

	男	女	計
産社再履習S	82 100.0		82 21.7
産社普通N	62 82.7	13 17.3	75 19.8
情報再履習S	15 93.8	1 6.3	16 4.2
情報普通N	58 86.6	9 13.4	67 17.7
福祉再履習S	30 83.3	6 16.7	36 9.5
福祉普通N	38 37.3	64 62.7	102 27.0
計	285 75.4	93 24.6	378 100.0

学年別学科別

	2年	3年	4年	5年以上	計
産S	10 12.2	22 26.8	37 45.1	13 15.9	82 21.7
産N	35 46.7	21 28.0	19 25.3		75 19.8
情S	15 93.8		1 6.3		16 4.2
情N	67 100.0				67 17.7
福S	4 11.1	13 36.1	16 44.4	3 8.3	36 9.5
福N	56 54.9	28 27.5	18 17.6		102 27.0
計	187 49.5	84 22.2	91 24.1	16 4.2	378 100.0

(注：情Sの4年、1名は誤答である)

総回答者数 378 名のうち再履習生は 134 名である。英語の再履習生については、そのために設けられているクラスで出席者には全員回答してもらった上で、さらに個別に回答者数を増やすべく努力を尽くしたが長期に大学に登校しない者も少数ながら存在し、対象者の把握に万全を期することができなかった。そうであるとしても今回の回答者数 134 名は英語の全再履習生のおよそ 9 割には達しており、その分析から多様な側面をもつ再履習生問題のリアルな姿に迫ることを十分期待してよいと思われる。

1. 中学時代について

問 12. 英語学習にたいする期待度

調査「大学英語教育」(以下、全国調査Zとする)

問 12. 英語学習にたいする期待度

	全然期待して いなかった					計
	1	2	3	4	5	
N 普通生	26 10.7	24 9.8	85 34.8	58 23.8	51 20.9	244
S 履習生	16 11.9	22 16.4	60 44.8	17 12.7	19 14.2	134
Z 全国調査	615 5.9	651 6.3	3,478 33.6	3,038 29.4	2,564 24.8	10,346

では、「4. やや期待していた」に「5. 非常に期待していた」を加えると 54.2% に達し、期待してなかった (1 + 2 で 12.2%) を大幅に上回り、約半数以上が中学校入学時に英語教育に期待を抱

いていたことを示していた。

これに対し、長野大学生（以下、長大生とする）の場合は、普通履習生（N）で、（4+5）44.7%、（1+2）20.6%であり、再履習生（S）で（4+5）26.9%、（1+2）28.3%である。再履習生において中学校入学時の期待度が、全国的な大学生の平均値を大幅に下回る〔（4+5）で27ポイント低く、（1+2）で16ポイント高い〕だけでなく、通常生でさえもかなり下回っている〔（4+5）で約10ポイント低く、（1+2）で9ポイント高い〕ことは注目される。長大生の一般的な傾向として、英語教育が公式にスタートする時点ですでに、英語学習にたいしかなり消極的な態度を有していたことが窺える。その原因は、さかのぼって彼らの中学校入学以前の勉学をも含む生活のあり方に内在すると考えられるが、今回の調査ではそこまで明らかにすることはできなかった。

問 13. 中学校時代の好き嫌い

	1 最初 から 好き	2 途中 から 嫌い	3 途中 から 好き	4 最初 から 嫌い	5 好嫌 なし	計
N	42 17.3	87 35.8	23 9.5	43 17.7	48 19.8	243
S	13 9.7	53 39.6	7 5.2	25 18.7	36 26.9	134
Z	4,381 42.4	1,748 16.9	1,458 14.1	600 5.8	2,154 20.8	10,341

全国調査では、「1. 最初から好き」と、「3. 途中から好きになった」を合わせると56.5%になり、過半数が英語に好意的に取り組んでいたのであるが、長大生の場合は、好き（1+3）が普通履習生26.8%、再履習生14.9%、嫌い（2+4）が通常生53.5%、再履習生58.3%で、全国的傾向とは反対に、過半数が中学校時代英語が嫌いであったことを今回の調査の結果は示している。このことはすでに本次の共同研究者、小川勝一が、長大生の場合「中学時代『英語』を得意教科とする者は26.6%で、（調査）9大学中最も低い」（註2）と報告していることに符合する。

さらに、「4. 最初から嫌い」が全国調査では

わずか5.8%であるのにたいし、長大生の場合、普通履習生で17.7%、再履習生で18.7%と多い。これは、問12の結果からも言えることであるが、最初から英語学習に期待を抱かず英語が嫌いな学生が全体の5分の1近くを占めている。また途中で「2. 好きから嫌い」に、あるいは「3. 嫌いから好き」に変わった者が、全国調査ではそれぞれ16.9%、14.1%とほぼ同数いるのにたいし、今回の調査では、普通履習生で(2)35.8% (3)9.5%、再履習生で(2)39.6%、(3)5.2%と好きから嫌いに転化したケースがその反対方向と比較して一方的に多い結果には考えさせられる。

長大生の中学時代の英語学習にたいする取り組み方は、最初から英語が嫌いとする者が相当数いるばかりでなく、最初は積極的に取り組んでいたが、途中何らかの原因でつまづき消極的な態度に変化した者が再履習生であるかにかかわらず、全体として3分の1以上いる。ここに注目すべき特徴がある。

問 14. 英語が好きになった理由

	1 よく 勉強 した	2 よく 理解 できた	3 授業 が楽し かった	4 先生 が好 き	5 その他	計
N	26 38.8	41 61.2	22 32.8	20 30.0	14 20.9	123 (67)
S	9 42.9	15 71.4	10 47.6	3 14.3	5 23.8	42 (21)
Z	1,353 23.2	3,805 65.3	1,004 17.2	698 12.0	686 11.8	(5,828)

中学校時代に英語が好きになった理由については、今回の調査には全国調査とほぼ同じ傾向が認められる。すなわち理解が好きにつながるということである。授業が楽しく、よく理解できたので、よく勉強することになったという関係が成り立つようである。なお、問13からもすでに明らかなことであるが、この質問の理由と対照的な次の「英語が嫌いになった理由」を比較してみると、回答者が全国調査では延べ人数で5,828対2,527と圧倒的に「好き」と答えた者が多いが、今回の調査では総合で165対414と逆転した結果がえられている。

問 15. 英語が嫌いになった理由

	1 勉強 しない	2 理解 できない	3 授業 が楽し くない	4 先生 が嫌 い	5 自分 に向 かない	6 その他	計
N	56 42.4	89 67.4	60 45.5	27 20.5	23 17.4	6 4.5	261 (132)
S	31 39.7	40 51.3	35 44.9	26 33.3	14 17.9	7 9.0	153 (78)
Z	795 31.5	901 35.7	702 27.8	617 24.4		248 9.8	(2,527)

全国調査と同様、今回の調査においても英語嫌いの第一の理由が「よく理解できなかった」ことであるが、その比率が全国の35.7%よりもはるかに高く、再履習生で半数、普通履習生では3人中2人までがこの選択肢を回答している。「先生が嫌いだったから」と答えた者も2割ないし3割いるが、他の項目に比して特に高くはない。このことから、英語教員に対する感情的な好嫌以前に、「よくわからない」ので「授業は楽しくなく」それで「勉強しなくなる」という落ちこぼれ現象がおきているものと推察できる。

ここで（全国調査の項目にないが）、「自分には向かない」との回答者が2割近くいることに注目したい。つまり英語は自分には向かないと自己判断して英語学習から遠去かった者が無視できない程度にいると言える。この場合むしろ生徒にそう思い込ませるように機能している現在の教育システムにこそ真剣な考慮が払われるべきではないのかと考える。（註3）

問 16. 視聴覚機器の使用度

	全 然 使 わ ず					計
	1	2	3	4	5	
N	28 11.5	49 20.1	74 30.3	55 22.5	38 15.6	244
S	26 19.5	33 24.8	34 25.6	26 19.5	14 10.5	133
Z	1,560 15.2	2,224 21.6	2,415 23.5	2,501 24.3	1,584 15.4	10,284

「1. 全然使われなかった」に「2. 余り使われなかった」を加えると再履習生は全国平均より約8ポイント高く、一方「よく使われた（4+5）」をみると約10ポイント低くなっている。普通履習生の場合は全国的数値に近い。このことから、長野大学の再履習生の発生と中学校時代の機器の使用度の間には、一定の相関関係があるとも言える興味深い結果が得られた。

問 17. 授業外英語学習

	1 ラジ オ テレ ビ テー プ	2 塾・ 予備 校	3 家 族 家 庭 教 師	4 参 考 書	5 外 国 人	6 そ 他	計
N	92 48.9	109 58.0	32 17.0	116 61.7	4 2.1	15 8.0	368 (188)
S	37 36.3	63 61.8	24 23.5	54 52.9	6 5.9	7 6.9	191 (102)
Z	2,574 31.4	5,003 61.1	944 11.5	2,734 33.4		208 2.5	11,463 (8,189)

今回の調査の全回答者数378人中290人もが、何らかの形で授業以外の英語学習をしている。全国調査では「塾や予備校で習った」61.1%と過半数を大きく上回っていたが、長大生の場合もそれに近い6割前後になっている。これは長大生の多くが県庁所在地以外の地方都市の、また進学率4割～9割の普通科高校の出身であることを考え合わせると、（註4）進学熱に駆り立てられて塾や予備校に通うということは、今や大都市に限らず地方にも及んでいることを窺わせるものである。また他の項目も全体に全国調査よりも高い。このことは英語学習にたいする長大生の中学時代の取り組みは、全国の学生に比較しても決して低くないことを示している。また外国人に習った者が若干名おり、殊に再履習生で6名もいることは興味深い結果である。外国人に習うことが英語学習の向上に単純には結びつかない場合があるといえよう。

問 18. 英語学習にたいする打ち込み度

問 19. 勉強全体にたいする打ち込み度

問 20. 生活全般についての満足度

英語学習にたいする打ち込み度は、普通履習生に比べて再履習生が相対的に低くなっている。

問 18	全然打ち込まず					計
	1	2	3	4	5	
N	28 11.5	60 24.6	83 34.0	59 24.2	14 5.7	244
S	26 19.4	41 30.6	47 35.1	16 11.9	4 3.0	134

問 19	全然打ち込まず					計
	1	2	3	4	5	
N	7 2.9	43 17.6	120 49.2	63 25.8	11 4.5	244
S	11 8.2	39 29.1	59 44.0	21 15.7	4 3.0	134

問 20	全然満足せず					計
	1	2	3	4	5	
N	16 6.6	58 23.8	71 29.1	75 30.7	24 9.8	244
S	15 11.2	23 17.2	39 29.1	43 32.1	14 10.4	134

〔(1+2) N36.1%、S50.0%、(4+5) N29.9%、S14.9%〕。これを問13の英語にたいする好き嫌いと比較してみると全体的に対応しているといえる(嫌いN53.5%、S58.3%、好きN26.8%、S14.9%)。ただし普通履習生の英語への打ち込み度(1+2)で36.1%のところ嫌いとする者が53.5%で17.4ポイントの開きがある。つまりこれは、普通履習生には英語は嫌いだけれどもある程度、積極的に取り組んだ者がいることを示しており、特にこのような傾向を示さない再履習生との間には差異がみられる。すなわち、このような英語学習にたいする姿勢の違いが大学にまで持ちこされ、それが普通履習生と再履習生の差を生み出しているとも言えよう。

次に英語学習への打ち込み度 問18と勉強全体への打ち込み度、問19を比較してみると打ち込み度の高いところでは大差ないが、打ち込み度の低い(1+2)では差異が目立つ。(問18. N36.1%、S50.6%、問19. N20.5%、S37.3%)。こ

れは先に言及した小川報告にあるとおり、長大学生は他大学生と比較して英語をとりわけ不得意としていることから首肯しうる結果である。

さらに問19と問20の生活全般についての満足度との関係をみてみる。程度の低い(1+2)では問20、N30.4%、S28.4%で再履習生は10ポイント下降している。程度の高い(4+5)ではN40.5%、S42.5%で普通履習生および再履習生ともに上昇している。ここから言えることは、長大学生の中学校時代は、生活全般については満足している者が満足しない者をかなり上回り、勉強全体については打ち込み度の低い者が多くなり、さらに英語に限ればその傾向はいっそう拡大し、打ち込む者よりも打ち込まない者が多くなり、その傾向はとりわけ再履習生において極立っている。

中学校時代のまとめ

全国調査は中学校時代の英語学習について、次のようにまとめている。

1. 中学校入学時の英語への期待が好きにつながっている。
2. 「最初から好きだった」(42.4%)が「最初から嫌いだった」(5.8%)を大幅に上回っている。
3. 好きだった理由は「よく理解できたから」である。
4. 嫌いだった理由は「よく理解できなかったから」である。
5. 15.2%が視聴覚機器は「全然使われなかった」と回答
6. 授業外での学習は「塾、予備校などで」61.1%の高率を占める、となる。

長野大学生に関する本調査の結果は全国調査と比較して共通する面をいくつかもちながらも、全体としては大きく異なる様相をみせている。それを箇条書きにしてみる。

1. 中学校入学時ですでに英語にたいして期待感をもたない者が相当数いる。
2. 全国調査では途中「好きから嫌いに」ないし「嫌いから好きに」変化した者がほぼ同数いたが、長大学生の場合、前者が圧倒的に多く、後者はごくわずかである。英語を嫌いとする者が好きとする者を断然上回る。

3. 「英語が好きになった理由」は全国調査と比較するとほぼ同じ傾向が認められるが、「よく理解できたから」とする者が大幅に減少している。
4. 「英語が嫌いになった理由」は全国調査とはほぼ同じである。
5. 視聴覚機器の使用度が、現在の長大生の英語に関する学力と態度に何らかの影響を与えているようである。
6. 打ち込み度および満足度をみると、英語学習にたいする打ち込み度が目立って低下している。
7. 総じて長野大学の英語「再履習生」問題の原因は、すでに彼らの中学校時代の英語学習のあり方に胚胎していると見ることができる。

2. 高校時代について

問21. 英語の好き嫌い

	1 最初 から 好き	2 途中 から 嫌い	3 途中 から 好き	4 最初 から 嫌い	5 好嫌 なし	計
N	28 11.5	30 12.3	25 10.3	91 37.4	69 28.4	243
S	10 7.5	11 8.2	9 6.7	69 51.5	35 26.1	134
Z	3,088 29.9	1,723 16.7	871 8.4	1,889 18.3	2,763 26.7	10,334

高校時代の英語について好き嫌いをみてみる。「最初から好き」に「途中から好きになった」を加えると、わずかに普通履習生で21.8%、再履習生で14.2%にすぎない。ちなみに全国調査は38.3%である。「途中から嫌いになった」に「最初から嫌い」を加えると、普通履習生で49.7%、再履習生で59.7%と過半数に近いかそれを大きく上回っている。全国調査のそれは35.0%である。今回の調査と全国調査を比較すると、長大生は全国の学生にたいし、「英語が好き」とする者で20ポイント前後下回り、「英語が嫌い」とする者で20ポイント前後上回っており、英語嫌いの傾向が明瞭である。なおこのことには、全国調査が明らかにした女性よりも男性に英語嫌いが多いという特徴が影響しているのかもしれない。今回の調査は全国調査よりもいっそう男性の占める比率が高くな

っている。〔今回²⁸⁵ / 378 = 0.754、全国^{6,124} / 10,291 = 0.595〕

中学校と高校の接続関係をみてみる。中学校で(問13)「英語が好き」(1+3)はN26.8%、S14.9%、「英語が嫌い」(2+4)はN53.5%、S58.3%であった。中学校で最初は好きでも途中から嫌いになる者が多く(その反対のケースは珍)、最初から嫌いと合わせると過半数を越えるのであったが、その傾向がそのまま高校に持ちこされている(高校で最初から嫌いとする者がN37.4%、S51.5% ちなみに全国調査18.3%)。

高校の途中で、「好きから嫌いに」と「嫌いから好きに」に転化するものがほぼ同数の1割前後いるものの大勢に変化が生じるまでには至っていない。全国調査は16.7%が高校に入学してからあらたに「英語嫌いになった」と報告しているが、長大生の場合それより低いのは、英語嫌いへの転化の時期がすでに中学校時代におこり固定化しているからと推察できる。

問22. 英語が好きになった理由

はじめに、問21から当然予測されることがあるが、回答者数が77名と少数であることが目を引く。それゆえこのように標本数が少ないと統計的に意味のある分析がなされないおそれもあるが一通り見ておく。

	1 よく 勉強 した	2 よく 理解 できた	3 授業 が楽し かった	4 先生 が 好き	5 その 他	計
N	15 26.3	27 47.4	19 33.3	14 24.6	15 26.3	90 (57)
S	9 45.0	8 40.0	9 45.0	9 45.0	3 15.0	38 (20)
Z	1,452 35.9	1,920 47.5	521 12.9	582 14.4	717 17.7	(4,043)

全国調査では、中学校時代と同様「よく理解できたから」(47.5%)が理由の第1位であり、次いで「よく勉強したから」(35.9%)である。長大生もそれとほぼ同じ傾向を示している。全国調査で「先生が好き」(14.4%)と「授業が楽しかったから」(12.9%)はそれ程高くはないが、長大生においてはこれらの項目も比較的高くなって

いる。それだけ長大生の場合は、英語教員とその授業のあり方から受ける影響が大きかったと言えるであろうか。

問 23. 英語が嫌いになった理由

問 23	1 勉強 しない	2 理 解 で き な い	3 授 業 が 楽 し く な い	4 先 生 が 嫌 い	5 そ の 他	計
N	64 54.7	75 64.1	43 36.8	29 24.8	7 6.0	218 (117)
S	40 49.4	50 61.7	44 54.3	21 25.9	7 8.6	162 (81)
Z	1,546 41.9	1,491 40.4	1,166 31.6	804 21.8	288 7.8	(3,689)

今回の調査は全国調査に比して1~4のいずれの項目も数値が高くなっている。それだけ長大生の英語嫌いが高じているわけである。「理解できなかったから」が6割を越え、次いで「勉強しなかったから」が5割前後に達する。この2つの項目は相関関係をなし、「理解できない」から「勉強しなく」なり、「勉強しない」からいっそう「理解できなくなる」のであろう。「先生が嫌いだったから」とする者が4人に1人はおり、「授業が楽しくなかったから」が、殊に再履習生で高く54.3%である。英語教員のあり方および授業の内容と方法が問われる結果である。

問 24. 授業内容

問 25. 視聴覚機器の使用度

問 26. 副読本

問 27. 校外英語学習

問24 授業 内容	1 大 意 把 握	2 日 本 語 に 訳 す	3 文 法 構 文 語 法	4 総 合 的 学 習	5 そ の 他	計
N	30 12.7	103 43.6	67 28.4	29 12.3	7 3.0	236
S	12 9.2	63 48.1	32 22.9	20 15.3	4 3.1	131
Z	932 9.0	5,680 54.7	2,406 23.2	1,177 11.3	84 0.8	10,332

長野大学生は高校時代に訳読中心の授業を受け

てきたことは、全国の大学生と同じであり、日本の英語教育を反映している。このことと大量の英語嫌いが長大生に生じていることにはいかなる関係があるのであろうか。省みて大学における英語教育のあり方が考えさせられるところである。

問25 機器	全 然 使 わ れ ず	1	2	3	4	非 常 に 使 わ れた	計
N	54 22.3	64 26.4	68 28.1	33 13.6	23 9.5	242	
S	45 33.6	38 28.4	28 20.9	15 11.2	8 6.0	134	
Z	2,505 24.1	3,001 28.9	2,316 22.3	1,644 15.8	876 8.4	10,343	

問26 副 読 本	1 0 冊	2 1~2	3 3~4	4 5~6	5 7~	計
N	58 24.7	74 31.5	61 26.0	31 13.2	11 4.7	235
S	49 36.6	47 35.1	25 18.7	7 5.2	6 4.5	134
Z	1,501 14.5	3,196 30.9	3,123 30.2	1,487 14.4	1,035 10.0	10,349

問27 校 外 学 習	1 ラ ジ オ テ レ ビ テ ー プ	2 塾 子 備 校	3 家 庭 教 師	4 族 親 問 題 集	5 参 考 書	6 外 人 仲 介 サ ル	7 そ の 他	計
N	57 36.5	45 28.8	12 7.7	129 82.7	11 7.1	10 6.4	22 14.1	(156)
S	34 40.4	25 30.0	9 10.7	59 70.2	7 8.3	9 10.7	13 15.5	(84)
Z	1,927 25.5	2,709 35.8	711 9.4	4,829 63.9	/	/	302 4.0	(7,559)

長大生の高校時代における視聴覚機器の使用度は高いとは言えない。殊に再履習生では使用されることが少なかったことを本調査は示している。中学校時代の間16と併わせて考えれば、機器使用度の少なさが英語学習への意欲の喚起をさまたげ、ひいては英語嫌いの生徒をつくり出す1つの

要因になっていると言えよう。

全国調査の報告書も高校時代に読む副読本の少なさを嘆いているが、長大生のそれはいっそう少なくなっている。特に再履習生で少なく、2冊以下とする者が71.7%に達する。このことは高校時代に読む英語の量が大学での英語学習の成否に影響していることを示唆している。

高校時代の校外英語学習を先にみた中学校時代のそれ(問17)と比較してみると、「参考書、問題集を利用して」が一段と高まり5~6割から6~8割へと上昇している。これにたいし塾や予備校で学んだ者が6割前後から3割前後へと下降している。独力で学習する者が多くなったということであろうか。総じて回答者でみる限り、長大生は高校時代に相当英語学習に努力して取り組んだ様子が窺われる。ただし問27の質問に答えなかった者が138名(36.5%)おり、この割合は全国調査の27.2%よりも高く、全体の3分の1強が授業以外では英語を学習することがなかったとみなされる。これは見逃せない特徴の1つである。

問28. 大学入試と高校の英語について

	全然足りなかった					計
	1	2	3	4	5	
N	20 11.3	25 14.2	43 24.4	34 19.3	54 30.7	176
S	13 11.9	14 12.8	25 22.9	12 11.0	45 41.3	109
Z	1,837 17.7	2,322 22.4	2,413 23.2	1,648 15.9	1,785 17.2	10,011

全国調査では十分間に合ったとする者は17.2%のみであるが、本調査ではそれを断然上回り、普通履習生で30.7%、再履習生で41.3%である。「間に合った」(4+5)とする者が長野大学生に多くなるのはどういう理由からであろうか(普通生50.0%、再履習生52.3%)。殊に再履習生のその割合が高くなっていることには意外な感じがしない訳でもない。英語にたいする苦手意識が高かった分それだけいっそう大学合格によって「間に合った」と感じられたのであろうか。なお入学試験と英語学習との関係は「再履習生」の項で再び考えるこ

とにする。(なお、長野大学の入学試験の「英語」の合格者最低点は、公表されているところによれば例年100点満点中50~60点であり特に低いとは言えないであろう。)

問29. 高校時代の英語学習にたいする打ち込み度

	全然打ち込まなかった					計
	1	2	3	4	5	
N	26 10.7	77 31.8	86 35.5	46 19.0	7 2.9	242
S	29 21.8	50 37.6	35 26.3	16 12.0	3 2.3	133

英語学習に「打ち込まなかった」(1+2)とするものが、通常生で42.5%、再履習生で59.4%いるのに対して、「打ち込んだ」(4+5)とする者はわずかに、普通履習生で21.9%、再履習生で14.3%にすぎない。高校時代に英語学習に積極的に取り組んだ者が少数であることを調査の結果は示している。なお、中学校時代の英語学習への打ち込み度 問18は、「打ち込まなかった」が普通履習生36.1%、再履習生50.0%、「打ち込んだ」が普通履習生29.9%、再履習生14.9%であったので、今回の調査はそれと比較していっそう打ち込み度の低下をきたしている。

ついで英語学習にたいする打ち込み度を高校生活のその他の側面(問30)との関わりで考察してみる。

問30. 高校生活における打ち込み度

(1) 授業

	全然打ち込まず					計
	1	2	3	4	5	
N	22 9.0	50 20.5	115 47.1	47 19.2	8 3.3	244
S	16 11.9	45 33.6	46 34.3	24 17.9	3 2.2	134

(2) 行事

	全然打ち込まず					計
	1	2	3	4	5	
N	25 10.3	42 17.4	71 29.3	61 25.2	43 17.8	242
S	20 14.9	22 16.4	29 21.6	29 21.6	34 25.4	134

(3) 部活

N	63 26.1	25 10.4	24 10.0	42 17.4	87 36.1	241
S	26 19.4	10 7.5	22 16.4	18 13.4	58 43.3	134

(4) ホームルーム

N	53 21.9	62 25.6	89 36.8	26 10.7	12 5.0	242
S	36 26.9	34 25.4	40 29.9	14 10.4	10 7.5	134

(5) 生徒会

N	94 38.8	63 26.0	45 18.6	21 8.7	19 7.9	242
S	56 41.8	27 20.1	21 15.7	13 9.7	17 12.7	134

(6) 受験勉強

N	25 10.4	47 19.5	107 44.4	50 20.7	12 5.0	241
S	23 17.2	28 20.9	55 41.0	22 16.4	6 4.8	134

(7) 友達

N	4 1.7	12 5.0	49 20.3	75 31.1	101 41.9	241
S	4 3.0	12 9.0	15 11.3	34 25.6	68 51.1	133

(8) 専門的な勉強・実習

N	71 29.5	74 30.7	62 25.7	19 7.9	15 6.2	241
S	46 34.3	27 20.1	31 23.1	17 12.7	13 9.7	134

問30の調査項目の中で、英語学習への打ち込みとの関連性が認められるのは、(1)「授業」と(6)「受験勉強」である。「授業」は普通履習生および再履習生とも「3.どちらでもない」が最も多い中高型であるが、「打ち込まなかった」(1+2)でみると普通履習生29.5%、再履習生45.5%と後者が前者を16ポイントも上回っている。なお「打ち込んだ」(4+5)とするのは両者にそれ程の相違はない。これを学科毎に見てみると、普通履習生の間では殆ど違いが認められないものの、再履習生の間では明瞭な差異が認められる。

	打ち込まない (1+2)	打ち込んだ (4+5)
産 S	39.0	17.1
情 S	56.3	25.1
福 S	55.6	25.0

「情報」と「福祉」にたいして「産社」の打ち込み度かなり下回っている。

「受験勉強」の項目も普通履習生、再履習生ともに中高型である。「打ち込まなかった」(1+2)は普通履習生で29.9%、再履習生で38.1%であり、後者が前者より8ポイント高く、「打ち込んだ」(4+5)は普通履習生で25.7%、再履習生で21.2%であり、後者が前者より4ポイント強低い結果となっている。

こうしてみると、長野大学の英語の再履習生は、高校生活の中で英語以外の勉強の面でも消極的であったことが確かめられる。しかし、それは英語の授業ほど極端な隔りが再履習生と普通履習生の間がないことも確認できるのであり、再履習生問題は高校時代の勉強一般の問題に単純には還元できない英語学習独自の側面があるということも等閑に付せないことである。

高等学校時代のまとめ

全国調査は高校時代の英語学習について、次のようにまとめている。

(1) 大学入学時(高校修了時)に英語好きの学生は半分もいない。しかも男女間に差がある。大体男子は3割、女子は5割が英語好きで入学する。英語嫌いで入学して来る学生が男子は4割、女子は3割弱もある。

- (2) 中学校時代の英語の好き嫌いが高校時代の英語の好き嫌いにはほとんどそのまま持ち込まれる。
- (3) 高校のリーダーの授業は8割弱が訳読授業となっている。
- (4) 高校の英語授業の5割余りは視聴覚機器をほとんど使っていない。
- (5) 大学に入学してくる学生の3割弱は、高校時代に授業以外には英語を学習しなかったとみてよい。

上を参照しつつ、今回の調査をまとめてみよう。

1. 最初から英語が嫌いとする者が多く、途中で嫌いになった者と合わせると過半数を越える。
2. 中学時代の英語嫌いが固定化しかつ一層拡大している。
3. 英語が嫌いになった最大の理由は「よく理解できなかったから」である。
4. 一般に訳読中心の授業を多く受けており、視聴覚機器の使用は少ない。それは殊に再履習生に目立っている。
5. 授業以外では英語を学習しなかった者が、36.5%にもなる。
6. 英語学習への打ち込み度は、全体的に低いが、その中でも再履習生の消極性が顕著である。英語への打ち込み度と「授業」および「受験勉強」への打ち込み度の間には相関関係がみ出される。

3. 英語「再履習生」問題について

(1) 一般的傾向

この問題について再履習生に直接問67~71で尋ねているので、それを手がかりに考えてゆきたい。

問67. 単位が取得できなかった直接の理由は何か。

単位の認定権はもちろん教員にあるわけであるが、単位が取得できなかった理由を彼ら自身はどう考えているのかを尋ねた項目である。

	成績がよくなかった	出席がよくなかった	途中で放棄試験受けず	その他	計
産	29 35.8	62 76.5	43 53.1	7 8.6	81 61.4
情	5 31.3	12 75.0	9 56.3	1 6.3	16 12.1
福	11 31.4	24 68.6	22 62.9	6 17.1	35 26.5
計	45 34.1	98 74.2	74 56.1	14 10.6	132 100.0

今回の調査における再履習生 134 名のうち 132 名が回答している。選択肢の複数（2つ以内）回答を可とした質問で、回答者延人数が 217 名であり、複数回答した者が 85 人（64.4%）いる。ここからも単位を取得できなかった直接的な理由でさえ、かなり複合的であることがわかる。

回答で最も多いのが「出席がよくなかった」の 98 人（74.2%）で 4 人中 3 人を数える。次いで多いのが「途中で放棄して試験を受けなかった」が 74 人（56.1%）である。この 2 つの項目は互いに関連し「欠席が多くなった」ので自から「放棄した」者が多数いると推測される。英語教員の立場からみて、実際、長大生の語学の授業への出席率は極めてよくない。語学単位の未修得の問題の主たる原因は、学生の欠席にあるというのが偽らざる感想である。それではなぜ欠席が多くなるのか。その責任は学生にあるのか、または教員の側にも責任の一端はあるのか。以下考えてみたい。なお成績不良を単位未修得の理由にあげる者が、延べ人数で全体の約 3 分の 1 を占めている。

問 68 単位が取得できなかった英語の授業の出席について

15 人と標本数の少ない「情報」を除いて「産社」と「福祉」をみると傾向に大きな違いがないので、学部全体として見てみる。すると予想通りの結果がえられた。

	まったく出席しなかった					計
	1	2	3	4	5	
S	15 18.5	40 49.4	18 22.2	5 6.2	3 3.7	81
J	5	8		1	1	15
F	7 19.4	16 44.4	8 22.8	3 8.3	2 5.6	36
計	27 20.5	64 48.5	26 19.7	9 6.8	6 4.5	132

「出席不良」（1 + 2）は 69.0% と 7 割近くに達し、「出席良好」（4 + 5）は 11.3% と 1 割強にすぎない。これは問 67 の結果と一致する。

問 69. 欠席の理由

はじめに、この質問への回答者 114 人中二重に回答した者が84人(73.7%)と高率であることが目につく。全体として「生活の乱れ」を欠席の理由とする者が74人(64.9%)と最も多く、次いで「自分の英語力不足」をあげる者が32人(28.1%)であり、その他の選択肢は1割から2割前後となっている。

	1 自分の英語力不足で授業が理解できない	2 授業が気に入らない	3 教員に好感がもてない	4 生活の乱れ	5 アルバイト	6 クラブやサークル	7 その他	計
S	16 22.9	17 24.3	15 21.4	46 65.7	15 21.4	9 12.9	4 5.7	(70)
J	5 38.5	4 30.8	5 38.5	6 46.2	2 15.4		1 7.7	(13)
F	11 35.5	4 12.9		22 71.0	5 16.1	6 19.4	5 16.1	(31)
計	32 28.1	25 21.9	20 17.5	74 64.9	22 19.3	15 13.2	10 8.8	198 (114)

それでは選択肢を個々に検討してゆく。1, 2, 3は学生自身の英語力および英語教員とその授業の仕方に関わるものであり、内容的に互いに関連していると考えられる。「1.英語力不足で授業が理解できない」を学科別にみると、「情報」で38.5%、「福祉」で35.5%と高く、「産社」(22.9%)は相対的に低くなっている。「2.授業の仕方が気に入らない」は「産社」(24.3%)と「情報」(30.8%)が高率で「福祉」では12.9%と低率である。「3.教員に好感がもてなかった」は「産社」が21.4%、「情報」が38.5%であり、「福祉」には回答者がいない。こうしてみると学科間には違いがある。「産社」と「情報」では自分の英語力の弱さに原因があるとみる者と教員の側に原因があるとみる者がそれぞれ一定の割合でいるのに対し、「福祉」では教員にというよりもむしろ学生自身の側に問題があると受けとめている者が多い。

ここで大学の英語の授業に関する調査項目(問37、問38、問39)との関わりでこの点をいずれも再履習生に限って検討してみる。「消極的に授業に取り組んだ理由」(問37)をみると、「英語が嫌いだから」が55.8%と最も多く、次いで「授業がつまらなかったから」が50.0%、「授業がわか

らなかったから」が37.2%であり他は1割台と低い。

問 37. 消極的に授業に取り組んだ理由

	1 英語が嫌い	2 英語は必要ない	3 授業がつまらない	4 先生が好き嫌い	5 授業がわからない	計
S	32 68.1	5 10.6	19 40.4	5 10.6	16 34.0	(47)
J	3	2	9	3	4	(13)
F	13 50.0	2 7.7	15 57.7	5 19.2	12	(26)
計	48 55.8	9 10.5	43 50.0	13 15.1	32 37.2	(86)

問 38. 問 37. で 3 と答えた者に、その理由

	1 程度が高すぎる	2 程度が低すぎる	3 教材がよくない	4 教え方がよくない	5 習いたいことが習えない	計
S	5	2	9	17	11	(27)
J	2	2	4	6	4	(10)
F	3	2	5	6	7	(14)
計	10 19.6	6 11.8	18 35.3	29 56.9	22 43.1	(51)

「授業がつまらない」とする理由(問38)は「教え方がよくない」が56.9%、「習いたいことが習えない」が43.1%、「教材が良くない」が35.3%と高率である。

問 39 英語の授業で改善すべき点

	1 教材	2 授業方法	3 クラスの人数	4 先生の質	計
S	27	54	20	25	(77)
J	2	13	3	8	(15)
F	21	29	7	8	(36)
計	50 39.1	96 75.0	30 23.4	41 32.0	(128)

「英語の授業で改善すべき点」(問39)には、「授業方法」をあげる者が圧倒的に多く75.0%であり、「教材」とする者が約4割いる。以上から端的に言えることは、「授業がつまらない」のは「教え方が良くない」からであり、それゆえに教材を含めて、授業方法の改善を再履習生の多くが要求しているということである。

問39で「先生の質」を問題とする者が41人(32.0%)いるので、問50「英語の先生について」のうち(1)「熱心さについて」(4)「英語力について」および(5)「授業の工夫について」を再履習生に限って試みる。「熱心さについて」は概ね評価が高く評価度の平均値は3.48である。

問50. (1)熱心さについて

	まったく熱心でない					計
	1	2	3	4	5	
S		9	35	23	15	82
J	1	3	5	6	1	16
F	2	3	12	13	6	36
計	3 0.2	15 11.2	52 38.8	42 31.3	22 16.4	134

「英語力について」は、いっそう高く評価度の平均値は3.74である。ただし教員の英語力が「まったく」に「余りない」を加えると9%いること

問79. 登校日数(週当り)

		6日	5日	4日	3日	2日	1日	登校しない	計
産	S	33 40.2	16 19.5	13 15.9	12 14.6	4 4.9	4 4.9		82 21.7
	N	24 32.0	25 33.3	17 22.7	5 6.7	2 2.7	2 2.7		75 19.8
情	S	5 31.3	1 6.3	5 31.3	3 18.8		2 12.5		16 4.2
	N	17 25.4	20 29.9	23 34.3	6 9.0		1 1.5		67 17.7
福	S	8 22.2	7 19.4	8 22.2	8 22.2	2 5.6	2 5.6	1 2.8	36 9.5
	N	54 52.9	26 25.5	11 10.8	4 3.9	1 1.0	5 4.9	1 1.0	102 27.0
計		141 37.3	95 25.1	77 20.4	38 10.1	9 2.4	16 4.2	2 0.5	378 100.0

には十分留意しなければならない。

(2)英語力について

	まったく				十分に		計
	1	2	3	4	5		
S	1	4	30	27	20	82	
J	1	2	4	4	5	16	
F		4	9	14	9	36	
計	2 1.5	10 7.5	43 32.1	45 33.6	34 25.4	134	

(3)授業の工夫について

	まったく				たいへん		計
	1	2	3	4	5		
S	9	11	41	17	4	82	
J	4	2	6	3	1	16	
F	3	9	13	9	2	36	
計	16 11.9	22 16.4	60 44.8	29 21.6	7 5.2	134	

ところが次の「授業の工夫について」は上の2つの項目とは様相が異なる。評価度の平均値は、2.77と低く全体に「評価しない」が「評価する」

を上回っていることは重視しなければならない結果である。要するに再履習生は英語教員について、熱心さと英語力では概ね評価しているものの授業に工夫が足りないとみている訳である。これは問39で英語の授業で改善すべき点に授業方法を挙げ

ている者が圧倒的に多かったことに符号する。学生の英語嫌いに率直に目を向け、学生の実態に即して授業の改善を図ることが我々英語教員の緊急の課題といえる。

問79登校日数および、問80授業への出席率について

問80. 授業への出席率

	9割以上	7～8割	5～6割	3～4割	1～2割	全くしない	計
産 S	8 9.8	19 23.2	28 34.1	19 23.2	7 8.5	1 1.2	82 21.7
産 N	19 25.3	28 37.3	20 26.7	6 8.0	2 2.7		75 19.8
情 S	2 12.5	4 25.0	4 25.0	4 25.0	2 12.5		16 4.2
情 N	23 34.3	18 26.9	17 25.4	5 7.5	4 6.0		67 17.7
福 S	2 5.6	4 11.1	9 25.0	17 47.2	4 11.1		36 9.5
福 N	27 26.5	36 35.3	30 29.4	7 6.9	1 1.0	1 1.0	102 27.0
計	81 21.4	109 28.8	108 28.6	58 15.3	20 5.3	2 0.5	378 100.0

問79の結果によれば、再履習生の登校日数は普通履習生よりも若干下回るが、それ程大きな落差はなく、比較的良好な状態といえよう。ところが、問80の「授業への出席率」をみると普通履習生と再履習生の差が歴然としてくる。普通履習生の5割以上の出席率は89.4%と約9割に達するのにたいし、再履習生のそれは59.7%と約6割にとどまる。大学に登校するという点では、普通履習生と再履習生の間に大差はないものの、授業への出席率ということになると再履習生は普通履習生に比して、きわめて悪い状況がある。問69で、英語の授業の欠席の理由に「生活の不規則」を挙げる者が64.9%もいたが、再履習生の間には「生活が不規則なために朝起きられず」登校が遅れ、午前中の授業（午前中に語学の授業が比較的多い）を欠席してしまうという状況が広くあることを、これらの調査の結果は教えている。

なお、欠席の理由に「アルバイト」や「クラブ、サークル活動」を挙げたものが19.3%、13.2%おり、過度のアルバイトやクラブ活動が授業への出席を妨げているケースが無視しえない程度に存在している。また問70、問71で未修得の英語の単位を再履習しているかを尋ねている。回答者130名

のうち再履習をしていない者は4名である。その理由はまちまちであり個別に指導をすべきケースであるが、中に登録手続きを怠った者が2人おり履習ガイダンスのいっそうの徹底が望まれる。

問31. 語学単位の修得状況と学年別の総単位の修得数の関係

各語学の単位修得者数を学年別総単位修得数の3つのランク（低い、やや低い、普通）ごとに見たのが次の表である。この表には2年で英語Ⅰ、英文Ⅰの履習者がいるなど誤答が含まれているが、全体的な傾向をここから読み取ることができる。

はじめに2年生をみると、20単位以下の低修得者では、英文Ⅰの修得率が55.6%であり、また独語と仏語を併せた第2外国語も5割以下の修得率にとどまっている。これにたいし31単位以上の普通修得者は第1外国語および第2外国語ともほぼ100%近く修得している。3年生になると、60単位未満の低修得者は英語、英文のⅠおよび第2外国語はほぼ修得しているものの、英語Ⅱおよび英文Ⅱの修得者は12名中わずか1名にとどまる。4年生の場合、60単位以下の低修得者は英語と英文のⅠは4割～6割台、英語と英文のⅡは1割～

問 31. 学年別単位修得別

	英語Ⅰ	英文Ⅰ	英語Ⅱ	英文Ⅱ	独語Ⅰ	独文Ⅰ	仏語Ⅰ	仏文Ⅰ	計
2年低い (0~20)	9 100.0	5 55.6	0 0.0	0 0.0	2 22.2	1 11.1	2 22.2	3 33.3	9 2.5
2年やや低い (21~30)	8 66.7	11 91.7	1 8.3	1 8.3	4 33.3	4 33.3	2 16.7	4 33.3	12 3.3
2年普通 (31~)	156 101.3	151 98.1	13 8.4	2 1.3	123 79.9	123 79.9	22 14.3	24 15.6	154 42.3
3年低い (~40)	10 83.3	11 91.7	1 8.3	1 8.3	6 50.0	4 33.3	3 25.0	3 25.0	12 3.3
3年やや低い (41~60)	8 88.9	8 88.9	4 44.4	5 55.6	5 55.6	6 66.7	5 55.6	5 55.6	9 2.5
3年普通 (61~)	63 100.0	61 96.8	56 88.9	53 84.1	36 57.1	35 55.6	24 38.1	24 38.1	63 17.3
4年低い (~60)	13 61.9	10 47.6	8 38.1	3 14.3	9 42.9	8 38.1	5 23.8	5 23.8	21 5.8
4年やや低い (61~90)	14 93.3	13 86.7	13 86.7	9 60.0	8 53.3	6 40.0	7 46.7	5 33.3	15 4.1
4年普通 (91~)	51 96.2	51 96.2	46 86.8	41 77.4	27 50.9	24 45.3	26 49.1	25 47.2	53 14.6
5年以上	12 75.0	12 75.0	10 62.5	3 18.8	8 50.0	9 56.3	3 18.8	3 18.8	16 4.4
計	344 94.5	333 91.5	152 41.8	118 32.4	228 62.6	220 60.4	99 27.2	101 27.7	364 100.0

3割台、第2外国語は6割台の修得率でありきわめて低調である。90単位以上の普通修得者は英文Ⅱが77.4%ではあるもの他は8割台の後半以上の高い修得率となっている。すなわち、この表からは、語学単位の修得状況と総単位の修得数の間には密接な関連があることが指摘できる。近年学内で学生指導の観点から取り組まれてきた単位未得学生問題の1因は、学生の語学学習のあり方にあると言える。

(2) 出身高校別と再履習生

はじめに、普通履習生と再履習生に分け学科毎に出身校別に分類したのが表1である。ついで、それを全学的にまとめて出身高校別に普通履習生と再履習生に分けたのが表2である。※(なお、ここにおけるNとSの比率は、この調査のかぎりであって、長大生全体のそれを直接に表わすものではないことをあらかじめ記しておく。)

表1

	普通 4割 以下	普通 4~ 9割	普通 9割 以上	職業	その他	計
産S	31 37.8	28 34.1	11 13.4	10 12.2	2 2.4	82 21.8
産N	21 28.4	35 47.3	13 17.6	5 6.8		74 19.6
情S	5 31.3	3 18.8	5 31.3	3 18.8		16 4.2
情N	15 22.4	32 47.8	13 19.4	7 10.4		67 17.8
福S	8 22.2	15 41.7	9 25.0	3 8.3	1 2.8	36 9.5
福N	22 21.6	48 47.1	26 25.5	3 2.9	3 2.9	102 27.1
計	102 27.1	161 42.7	77 20.4	31 8.2	6 1.6	377 100.0

表2

	N	S	計
普通科(進 1.学志望率4 割以下)	58	44 43.1	102
普通科 2.(4割 9割)	115	46 28.8	161
3.普通科 (9割以上)	52	25 32.5	77
4.職業科	15	16 51.6	31
5.その他	3	3	6
計	243	134	377

表2をみると普通科出身者はその進学志望率の高さに反比例して再履習生の割合が低くなるとは単純には言えない。再履習生の比率は進学志望率4割以下の普通科の出身者で43.1%、4割～9割の志望率校では28.8%であるが、9割以上の志望率校のところではそれより高く32.5%となっている。高校までの偏差値ランクがストレートに本学での英語の単位の修得に結びついている訳ではない。このことは我々に単位未修得の問題を偏差値の高低のみに還元するのではなく、多角的な視点から検討すべきことを示唆している。

ついで、職業科出身生をみると再履習生は31人中16人(51.6%)である。確かにこれは普通科出身生と比較して高い数値であることは否めない。しかし視点を変えてみれば、英語学習という点では恵まれない環境にある職業科の出身生ではあっても、その約半数は英語の単位を不許可とはならず修得している訳である。またこれまで職業科出身の長野大学生の大多数が、卒業し社会に巣立っていったことも否定できない事実なのである。それでは再履習生問題を、その比率が比較的高い進学志望率4割以下の普通科と職業科に着目しつつ、中学から大学までの接続関係の中でもう少ししていねいに見てゆくことにする。

中学校時代

出身高校別に中学校時代にさかのぼって、英語学習および勉強全体にたいする打ち込み度を検討してみる。英語学習への打ち込み度の平均値は「9

問18. 英語学習にたいする打ち込み

	全 く 打 ち 込 ま ず					計
	1	2	3	4	5	
4割以下	26 25.5	31 30.4	25 24.5	16 15.7	4 3.9	102 27.1
4割～9割	13 8.1	38 23.6	68 42.2	34 21.1	8 5.0	161 42.7
9割以上	6 7.8	21 27.3	26 33.8	18 23.4	6 7.8	77 20.4
職業	8 25.8	10 32.3	9 29.0	4 12.9		31 8.2
その他	1 16.7	1 16.7	1 16.7	3 50.0		6 1.6
計	54 14.3	101 26.8	129 34.2	75 19.9	18 4.8	377 100.0

割以上」および「4～9割」の進学志望率の普通科で高く2.96と2.74である。「4割以下」と職業科ではやはり低く2.42と2.29であり、総合で2.74である。勉強全体にたいする打ち込み度は総じて英語学習にたいするそれよりも高くなっており、平均値が総合で2.99である。「9割以上」の進学志望率校で平均値が3.36と最も高く、次いで「4～9割」3.04、職業科2.77、「4割以下」2.70と続いている。こうしてみると、長野大学生は中学時代すでに全教科の中でも特に英語を苦手とした者が多く、そのことによって、英語の偏差値が選別的に機能する現在の教育システムの中で、自ずと彼らの進学先も決ったと言えるであろう。

問19. 勉強全体にたいする打ち込み

	全 く 打 ち 込 ま ず					計
	1	2	3	4	5	
4割以下	8 7.8	31 30.4	49 48.0	12 11.8	2 2.0	102 27.1
4割～9割	3 1.9	32 19.9	85 52.8	37 23.0	4 2.5	161 42.7
9割以上	4 5.2	8 10.4	30 39.0	26 33.8	9 11.7	77 20.4
職業	1 3.2	11 35.5	13 41.9	6 19.4		31 8.2
その他	2 33.3		1 16.7	3 50.0		6 1.6
計	18 4.8	82 21.8	178 47.2	84 22.3	15 4.0	377 100.0

高等学校時代

問21. 高校時代、英語の好き嫌い

	最 初	途 中	途 中	最 初	ど ち	計
	か 好	か 嫌	か 好	か 嫌	ら も	
4割以下	9 8.8	5 4.9	9 8.8	48 47.1	31 30.4	102 27.1
4割～9割	19 11.8	17 10.6	14 8.7	66 41.0	45 28.0	161 42.8
9割以上	6 7.8	15 19.5	5 6.5	34 44.2	17 22.1	77 20.5
職業	3 9.7	4 12.9	5 16.1	9 29.0	10 32.3	31 8.2
その他	1 20.0		1 20.0	2 40.0	1 20.0	5 1.3
計	38 10.1	41 10.9	34 9.0	159 42.3	104 27.7	376 100.0

問21で英語の好き嫌いをみてる。全体としては、「嫌い」(2+4)が過半数を越えるのにたいし、「好き」(1+3)は2割弱にとどまっている。中学時代の英語嫌いがそのまま持ち込まれ、さらに拡大することは分析済みである。類型別にみての特徴の1つは、「9割以上」の進学志望率校で「最初好きだったが途中から嫌いになった」が約2割いることである。中学校時代に英語好きが比較的多い「9割以上」の高校でも途中で英語嫌いが高じてゆく。普通科では進学志望率の高低にかかわらず、いずれの類型においても英語嫌いが半数を越えるという深刻な状況を呈している。

これにたいし職業科では「好き」(1+3)が25.8%と他の類型と比較してかなり高く(平均19.1%)、「最初きらいだったが途中から好きになった」が16.1%と他に比べ最高である。また、最初から嫌いとする者が29.0%と最も低率であることも注目に値する現象である。これは普通科と職業科の教育課程の違いによるところも大きいのであろうが、英語を中心科目の1つとしての偏差値で選別されて進む者が多いとされる職業科生が、中学時代の苦手な英語を克服しようとして取り組んだ積極的な姿勢には肯定的に評価が与えられてしかるべきである。また、問22で英語が好きになった理由を職業科生についてみると、「授業が楽しかったから」が44.4%、「先生が好きだったから」が55.6%と高い数値を示している。これは我

問30-1 授業

	全く打ち込まず					計
	1	2	3	4	5	
4割以下	14 13.7	25 24.5	37 36.3	22 21.6	4 3.9	102 27.2
4割~9割	12 7.5	44 27.5	75 46.9	25 15.6	4 2.5	160 42.7
9割以上	8 10.4	20 26.0	35 45.5	13 16.9	1 1.3	77 20.5
職業	2 6.5	6 19.4	12 38.7	9 29.0	2 6.5	31 8.3
その他	2 40.0		1 20.0	2 40.0		5 1.3
計	38 10.1	95 25.3	160 42.7	71 18.9	11 2.9	375 100.0

々大学の英語教員にたいして、英語が嫌いで不得手な学生にいかにか臨むかという点での良い教訓を与えている。

さらに問30で質問した高校生活におけるいくつかの活動の中で、職業科生は「授業」と「専門的な勉強や実習」で他の類型に比較して高い打ち込み度を表わしている。

問30-8 専門的な勉強や実習

	全く打ち込まず					計
	1	2	3	4	5	
4割以下	39 38.2	25 24.5	21 20.6	9 8.8	8 7.8	102 27.3
4割~9割	47 29.6	47 29.6	49 30.8	13 8.2	3 1.9	159 42.5
9割以上	25 32.5	26 33.8	18 23.4	7 9.1	1 1.3	77 20.6
職業	3 9.7	3 9.7	2 6.5	7 22.6	16 51.6	31 8.3
その他	3 60.0		2 40.0			5 1.3
計	117 31.3	101 27.0	92 24.6	36 9.6	28 7.5	374 100.0

「授業」の打ち込み度の平均値が全体で2.79にたいし、職業科は3.10であり、「専門的な勉強等」は、全体が2.35にたいし職業科は3.96と圧倒的に高い数値を示している。職業科生のこのような授業や勉強等にたいする積極的な態度が、ひいては苦手とした英語の学習に良い影響を与えているものと推察できる。また、英語学習にたいする打ち込み度(問29)を類型別にみると、その平均値が「4割以下」の普通科で2.57、「4割~9割」2.61「9割以上」2.58、「職業科」2.52であり、特に職業科が低いということではなく、押しなべて低いのが特徴である。

大学時代

長野大学に入学してから、英語の授業にどの程度積極的に取り組んだかを出身高校別に示したのが表1である。5段階の取り組み度を高い順に並べると、「4~9割」の進学志望率校2.60、「4割以下」と「9割以上」はともに2.42、「職業科」

表1. 英語の授業にたいする取り組み

	消極的に				積極的に		計
	1	2	3	4	5		
4割以下	13 13.4	39 40.2	37 38.1	7 7.2	1 1.0	97 26.8	
4割～9割	21 13.5	51 32.7	58 37.2	22 14.1	4 2.6	156 43.1	
9割以上	21 28.4	16 21.6	24 32.4	11 14.9	2 2.7	74 20.4	
職業	7 24.1	8 27.6	13 44.8	1 3.4		29 8.0	
その他	2 33.3	1 16.7	2 33.3		1 16.7	6 1.7	
計	64 17.7	115 31.8	134 37.0	41 11.3	8 2.2	362 100.0	

表2. 消極的に取り組んだ理由

	英語が嫌いな	必要がない	つまらない	先生が嫌いな	授業がわからない	計
4割以下	28 57.1	4 8.2	23 46.9	6 12.2	21 42.9	49 27.8
4割～9割	38 55.1	9 13.0	36 52.2	8 11.6	17 24.6	69 39.2
9割以上	17 43.6	6 15.4	24 61.5	4 10.3	9 23.1	39 22.2
職業	9 56.3	1 6.3	7 43.8	1 6.3	7 43.8	16 9.1
その他	2 66.7	0 0.0	1 33.3	0 0.0	1 33.3	3 1.7
計	94 53.4	20 11.4	91 51.7	19 10.8	55 31.3	176 100.0

2. 28、全体で2.49である。職業科出身生が最も低い、平均との差は0.2ポイントしかなく、全体的に低調なのである。これは中学校時代や高校時代の英語学習への打ち込み度と比較しても一段と低くなっており〔中学2.75、高校2.56〕、憂慮すべき事態である。

それでは、英語の授業への取り組みが消極的になるのはなぜなのかを表2.でみてみよう。全体的な傾向は「英語が嫌い」53.4%、「授業がつまらない」51.7%、「授業がわからない」31.3%で、これらが3大要因である。個別に検討すると、「4割以下」の普通科と職業科の出身生で「授業がわからない」とする者の比率が高く、それぞれ42.9%と43.8%である。それにたいし「9割以上」の

普通科では「授業がつまらない」とする者が61.5%と高く「授業がわからない」と「英語が嫌い」は相対的に低くなっている(それぞれ23.1%、43.6%)。「4割以下」の普通科と職業科はタイプを同じくし、それらにたいし「9割以上」の普通科は対照的である。「4～9割」の普通科は、これら2つのタイプの中間的性格を有している。

問38で「英語の授業がつまらなかった理由」を質問したところ、回答者数は123名であった。全体的にみて、「習いたいことが習えない」(46.3%)、「教え方がよくない」(44.7%)、「教材がよくない」(31.7%)が、いずれの類型においても程度の差はあれ、高くなっている。

問38. 授業がつまらなかった理由

	程度が高すぎた	程度が低すぎた	教材がよくない	教え方がよくない	習いたいことが習えない	計
	1	2	3	4	5	
4割以下	6 19.4	5 16.1	8 25.8	17 54.8	14 45.2	31 25.2
4割～9割	6 12.5	11 22.9	18 37.5	17 35.4	28 58.3	48 39.0
9割以上	0 0.0	11 37.9	9 31.0	15 51.7	8 27.6	29 23.6
職業	5 35.7	0 0.0	4 28.6	6 42.9	6 42.9	14 11.4
その他	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	1 0.8
計	17 13.8	28 22.8	39 31.7	55 44.7	57 46.3	123 100.0

「程度が高すぎた」は「職業科」で高く35.7%、ついで「4割以下」19.4%、「4～9割」12.5%であり、「9割以上」にはいない。「程度が低すぎた」は「9割以上」37.9%、「4～9割」22.9%、「4割以下」16.1%であり「職業科」にはいない。こうしてみる限り「9割以上」の普通科出身生と職業科出身生は、対極的な位置にある。それゆえに「教え方がよくない」や「習いたいことが習えない」はどの類型でも高率であるが、その内容は決して一様ではないといえる。学生の出身背景の違いから生じてくる多様な要求に見合った英語の授業の内容と形式を、いかにつくり出してゆくかが、我々英語教員に負わされた課題である。

(3) 大学入学試験と再履習生

出身高校別に長野大学に入学した際の試験の種類をみたのが表1.である。推薦入試による入学者の割合は全体で39.1%であるが、職業科と「4割以下」の普通科の出身生ではその割合は高く、それぞれ77.4%と51.5%である。

表1.

	推薦	一次	二次	その他	計
4割以下	52 51.5	39 38.6	9 8.9	1 1.0	101 26.9
4割～9割	49 30.4	83 51.6	29 18.0		161 42.8
9割以上	21 27.3	40 51.9	15 19.5	1 1.3	77 20.5
職業	24 77.4	5 16.1	2 6.5		31 8.2
その他	1 16.7	5 83.3			6 1.6
計	147 39.1	172 45.7	55 14.6	2 0.5	376 100.0

表2.

	推薦	一次	二次	その他	計
産 S	26 31.7	46 56.1	10 12.2		82 21.8
産 N	28 37.8	33 44.6	13 17.6		74 19.6
情 S	9 56.3	3 18.8	4 25.0		16 4.2
情 N	24 35.8	29 43.3	14 20.9		67 17.8
福 S	19 52.8	11 30.6	5 13.9	1 2.8	36 9.5
福 N	42 41.2	50 49.0	9 8.8	1 1.0	102 27.1
計	148 39.3	172 45.6	55 14.6	2 0.5	377 100.0
S	54 40.3	60	19	1	134
N	94 38.7	112	36	1	243

再履習生を入試別に学科毎にみると(表2)、「情報」で56.3%、「福祉」で52.8%が推薦入試による学生で、平均の39.3%をかなり上回っているが、「産社」は31.7%と低い。これを学部単位で

みると推薦入試による比率は再履習生が40.3%、普通履習生が38.7%である。前者の方が後者よりも比率がやや高い(1.6ポイント)が、特別に高いとは言えない。もちろんこれは今回の調査のかぎりであって、現実の長大生全体における割合を表すものではないが、それを反映しているとは言えよう。

入学試験との関わりで再履習生問題を考える場合、とりわけ入学後の英語学習への取り組み方が検討の対象になってくる。それで大学での英語の授業にたいする取り組み度(表3)をみると、5段階による積極度の平均値は「二次試験」が2.63、「推薦」が2.53、「一次試験」が2.29であり総合で2.49である。全体的に低調であるが、その中で推薦入試による入学者は比較的健闘していると言えよう。

表3. 英語の授業にたいする取り組み

	消極的				積極的		計
	1	2	3	4	5		
推薦	22 15.5	44 31.0	56 39.4	19 13.4	1 0.7	142 39.2	
一次	37 22.3	52 31.3	55 33.1	18 10.8	4 2.4	166 45.9	
二次	5 9.6	19 36.5	21 40.4	4 7.7	3 5.8	52 14.4	
その他			2 100.0			2 0.6	
計	64 17.7	115 31.8	134 37.0	41 11.3	8 2.2	362 100.0	

表4. 消極的に授業に取り組んだ理由

	英語が嫌	必要がない	授業がつまらない	先生が嫌い	授業がわからない	計
推薦	35 53.8	7 10.8	35 53.8	7 10.8	25 38.5	65 36.9
一次	51 58.6	10 11.5	42 48.3	7 8.0	26 29.9	87 49.4
二次	8 33.3	3 12.5	14 58.3	5 20.8	4 16.7	24 13.6
計	94 53.4	20 11.4	91 51.7	19 10.8	55 31.3	176 100.0

表4.で授業に消極的に取り組んだ理由をみると、「推薦」で授業がわからないとする者が38.5%い

るのが目を引く。当然そのことと関連するが「授業がつまらなかった理由」(表5)において、「推薦」は「程度が高すぎる」が22.2%、「教え方がよくない」が53.3%と他の類別よりも高い数値を示している。それゆえに「推薦」の84%もが授業方法の改善をもとめているところである。

表5. 授業がつまらなかった理由

	程度が高すぎる	程度が低すぎる	教材がよくない	教え方がよくない	習いたことが習えない	計
推薦	10 22.2	7 15.6	14 31.1	24 53.3	22 48.9	45 36.3
一次	5 8.9	12 21.4	19 33.9	23 41.1	28 50.0	56 45.2
二次	2 8.7	9 39.1	7 30.4	9 39.1	7 30.4	23 18.5
計	17 13.7	28 22.6	40 32.3	56 45.2	57 46.0	124 100.0

表6. 授業で改善すべき点

	教材	授業方法	クラスの人数	先生の質	計
推薦	58 40.3	121 84.0	24 16.7	38 26.4	144 39.5
一次	62 36.7	126 74.6	34 20.1	49 29.0	169 46.3
二次	17 34.0	37 74.0	13 26.0	11 22.0	50 13.7
その他	1 50.0	1 50.0	0 0.0	2 100.0	2 0.5
計	138 37.8	285 78.1	71 19.5	100 27.4	365 100.0

この項を簡単にまとめておくと、推薦入試による入学者は、4割以下の進学志望率の普通科および職業科の出身生に多い。「推薦」による学生の比率は、学科間に違いがあるが学部全体としてみれば、再履習生の方が普通履習生の場合よりもやや高いという程度にすぎず、顕著な差異は認められない。推薦入試を経ての長大生は、概して英語の授業に比較的熱心に取り組んでいるが、程度が高すぎて授業がわからないとする者が一定の割合を占め、授業方法の改善を要求している者が多数いるという状態である。このことが再履習生の発生に直接結びつく訳ではないが、潜在的な要因をなし

ているとは言えよう。しかしそれは基本的には一般入試による学生にも当てはまると言えることは、先に中学時代および高校時代の英語で見たとおりである。

おわりに

ここまで長野大学の英語再履習生問題を中学校、高等学校、大学の接続関係の中で把握し分析することに取り組んできたが、なお未解明な部分も多く今後の系統的な調査をまたなければならないところである。が、これまでの要点を振り返ることによってひとまずまとめにかえたい。なお当再履習生問題は本次の共同研究者、岩崎正也と小川勝一の報告によっていっそう総合的に把握されてゆくであろう。

1. 英語再履習生の発生のメカニズム

(1) 中学校時代：英語が最初から嫌いとする者が相当数おり、また途中から嫌いに転化する者を併わせると過半数を越える。これは「大学英語教育調査」における約2割の英語嫌いと比較しても顕著に高い数値である。反対に英語が好きとする者が約2割にとどまり、殊に再履習生の場合は14.9%ときわめて低い。勉強全体への打ち込み度は全般に余り高くはないが、その中でも英語学習への打ち込み度は特に低下が目立ち、長野大学生が中学校時代とりわけ英語を不得意としていた姿が浮び上がってくる。その原因の解明には今後、なおいっそうの調査研究を必要としている。

(2) 高等学校時代：中学校時代の英語嫌いが固定化し、さらに拡大している。「大学英語教育調査」では英語嫌いが3.5割であるのにたいし、長大生の場合は5～6割に及ぶ。好きとする者はわずか1～2割前後である。英語が嫌いになる最大の理由は「よく理解できないから」である。一般に訳読中心の授業を多く受けており、視聴覚機器の利用が少ない。この傾向は殊に再履習生に目立っている。

(3) 大学に入学後：中学校、高等学校での英語嫌いがそのまま大学での英語学習にもちこされてくる。本調査では全体の5割近くの者が英語の授

業に消極的に取り組んだと回答している。その理由としては「英語が嫌い」が53%と最も多く、次いで「授業がつまらない」52%、「授業がわからない」31%である。「授業がつまらない」ことの主な理由は「習いたいことが習えない」および「教え方が良くない」からであり、授業にたいする不満が相当高い。教師にたいする評価は、熱心さと英語力では高い数値が出ているが、授業の工夫という点では酷しい結果が表われている。長野大学の英語教育の現状を率直に述べると、英語嫌いの学生が過半数を越えているという実態に必ずしも即してはならず、また出身学校の多様性や国際化情報化といわれる現代の社会環境から生まれてくる学生の英語学習への多面的な要求に必ずしも適しているとは言い難い。それゆえに多くの学生が教材を含めて授業方法の改善をもとめているところである。

(4) 以上のような学生全体に広く見られる英語嫌いと授業への不満が、再履習生問題の潜在的な要因を形成している。再履習生が生まれてくる直接的な原因は圧倒的に授業への欠席にあることは事実である。その欠席の理由には教員や授業への不満よりもむしろ、学生生活の乱れを挙げる者が断然多い。この点の深い分析、解明は小川の報告を待つことにしたいがとりあえずは、授業への欠席は生活の不規則が直接的な引き金となっておくるものの、欠席が常態化し再履習生として顕在化するのには、もともとの英語嫌いと授業への不満のために英語学習へのモチベーションが低下していることが、潜在的ではあるが本質的な原因をなしていると言えるのではなかろうか。

(5) 出身高校別に再履習生を見ると、確かに4割以下の進学志望率の普通科と職業科の出身生に比率が高くなっている(4~5割)。しかし再履習生問題を単純に出身背景に還元して捉えることは正しくはないであろう。9割以上の進学志望率の普通科の出身生にも3割以上の再履習生が生まれているのであるから(以上の比率は本調査のかぎり)。むしろ英語の嫌いな者が多数進むとされる職業科の出身生が、高校時代に英語学習に比較的積極的に取り組んだ姿勢からは学びうるところが大

である。それがなぜ大学入学後の英語学習に連続しないのであろうか、このことこそ問われるべきである。今後は出身背景の違いから生まれてくる画一的ではない学生の要求に見合った英語教育をいかに作り出してゆくかが英語教員に負わされた課題と言えよう。

なお入学試験の種類別では再履習生問題に関して顕著な差異は分節化されなかった。ただし推薦入試を経ての学生に授業への不満が特に強く見られる。

2. 若干の感想

最後に英語再履習生問題に関して若干の感想めいたものを記しておきたい。

長野大学の英語教育においてこれまで再履習生は広く存在してきた。基本的には社会の変化に規定されて、また直接的には近年の18才人口の急増急減期に左右されて、入学生の質は年毎に変化するであろう。それに応じて再履習生問題も質量ともに変化してゆくであろう。しかしそれは、現在の学校教育に支配的な偏差値体制の中で英語が有効な選別的手段として機能している状況に根本的な変化が生じないかぎり、消滅しない問題ではなかろうか。それゆえにこの問題は、程度の差こそあれ長野大学1つにとどまらず、いずれの大学でも起こりえる一般的な性格を有していると言るのである。

振り返って戦後教育を一瞥すれば、高度経済成長期が終わり低成長期に入った1970年代後半以降、受験競争はいっそう深刻となり、偏差値による選抜システムは小学校の低学年にまで及ぶに至っている。その中でいったんこの体制から「落ちこぼれた」子供たちは再び浮かび上がることが、困難な仕組みができあがっていると言われる。(註5)そして大かれ少なかれこのような落ちこぼれを経験した者が多数大学に入学してくるのは高等教育の大衆化が進んだ今日、必然であろう。本稿が取り組んできた英語再履習生問題は、大仰に言えば、このような今日の教育の矛盾の1つの集約点なのである。それゆえにこの問題にいかなるアプローチをするかは、高度に発達した現代社会での教育のあり方に深く結びついている。だから再履習生問題を単に学生の怠慢と英語力不足に起因するとみて一蹴してしまうことは容易ではあるが、教育

の本来のあり方からは遠いと言える。

もとより有益な提案が今の筆者にできるわけではないので、ここで「わかる」ということについての堀尾輝久氏の説を引いて本稿を閉じることにはしたい。なぜなら生徒や学生が中学から大学に至るいずれの段階でも英語が嫌いになる主たる理由の1つは「わからない」ことにあるからである。ゆえに彼らを英語好きにさせる最善の方法はわかる授業を展開することである。堀尾氏は「わかる」ということを分類して、ものごとを知識として知り記憶している情報知、複雑な事象を分析的に理解する分別知、ものごとの本質的な理解である了解知、何かができるようになる実践知を挙げている。(註6)国際化がうたわれる今日、実践知に必要な強調を置きつつこれら4つのそれぞれのレベルで「わかる」ということが実現できる英語教育が強くもとめられているのであり、このようなアプローチが英語再履習生問題への有効な対策の1つとなりうるのではなかろうか。

〔註〕

1. 大学「一般英語」教育実態調査研究会、『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(Ⅱ)―学生の立場』1985年3月31日。なお、今回の調査研究を実施するに当たっては、当報告書を参照させていただいた。記して謝意を表します。
2. 小川勝一、「大学生の進路選択の諸問題」、『長野大学紀要』第10巻第3号、1989年2月、P 81
3. 小川勝一、埼玉県高等学校教育研究会議、『いま青年期教育をどうつくるか―高校生像と教育実践』あゆみ出版、1989年7月、P 71
4. 小川、前掲論文「大学生の進路選択」P 83
5. 堀尾輝久、『教育入門』岩波新書1989年 PP 85-6
6. 同上書、PP 154-58

(1990. 10. 9 受理)

大学一般教育の英語に関するアンケート

このアンケートは本学一般教育の英語の授業での学生の実態調査を目的として実施します。下記のことにご注意して答えてください。なお、この調査は無記名で全て統計的に処理し、個人のデータとして用いることは絶対ありませんので、思ったままの気持ちをご回答ください。

- 質問をよく読み、率直に答えてください。
- 選ぶ選択肢の数が指示されていない場合は、1つだけ選んでください。ただし、念のため[1つだけ選んでください]と書いてある場合もあります。
- 選択肢がスケールで

1	2	3	4	5

 のように示してある場合は、1がその程度が最低(少)で、3が中くらい、5が最高(大)と考えてください。2は1と3、4は3と5の中間の程度を示します。
- 質問によっては、遠く離れて前にある質問とつながっているものがあります。前の質問を確認してから答えてください。

I. あなた自身について

- 問1. 性別: 1. 男 2. 女
- 問2. 所属学科: 1. 産業社会 2. 産業情報 3. 社会福祉
- 問3. あなたの学年は 1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年
5. 5年以上
- 問4. (問3に5年以上と答えた方に) 留年した主な理由は何ですか [2つ以内で選んでください]
- 希望の仕事先に就職するため
 - 卒業に必要な単位が修得できなかったため
 - 病気やけがの療養のため
 - 自由な自分の時間ももっとほしかったため
 - 学生という身分のほうが何かと都合がよいので
 - このまま社会に出るのが不安だったため
 - まだ社会人としての責任を負いたくないため
 - もっと勉強を続けたかったため
 - クラブやサークル活動を続けたいため

II 卒業した高校と大学進学の実態について

- 問5. あなたの卒業した高校の学科を聞きます。
- 普通科 (全校進学志望率およそ4割以下)
 - 普通科 (全校進学志望率およそ4~9割以下)
 - 普通科 (全校進学志望率およそ9割以上)
 - 職業科
 - その他 ()
- 問6. その高校はあなたの第一志望の学校・学科でしたか。
- はい
 - いいえ
- 問7. 受験した入試の種類: 1. 推薦入試 2. 試験入試1次 3. 試験入試2次 4. その他 ()
- 問8. あなたは現役で入学しましたか: 1. はい 2. いいえ
- 問9. 現在の大学・学部(学科)は、あなたの当初の希望どおりですか。
- はい
 - いいえ

問10. (現在の大学・学部が当初の希望どおりでなかった方に)

当初の希望(第1志望)はどこでしたか。

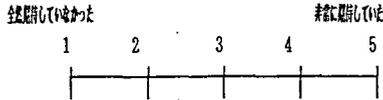
- 他大学同一学部(学科)
- 他大学他学部(学科) → 学部学科名()
- 本大学他学科 → 学科名()

問11. あなたは大学進学を決めるさい、次の事柄をどの程度考えに入れましたか。

- | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1. 自分の成績 | | | | | |
| 2. 自分の興味・関心 | | | | | |
| 3. 自分の性格や向き不向き | | | | | |
| 4. 資格をとること | | | | | |
| 5. 家庭の経済力 | | | | | |
| 6. 専門知識を身につける | | | | | |
| 7. 教養を身につける | | | | | |
| 8. 自由な時間が得られる
(学生生活をエンジョイするため) | | | | | |
| 9. 安定した地位を得る
(就職に有利、学歴がないと将来困る) | | | | | |
| 10. まわりの皆が行くから | | | | | |
| 11. 自分の将来の人生
計画・目標 | | | | | |
| 12. 家庭の勧め | | | | | |
| 13. 先生の勧め | | | | | |
| 14. 生涯打ち込める
ものを見つけるため | | | | | |

Ⅲ 中学時代について

問12. 中学に入学するとき、あなたは英語学習についてどう思っていましたか。



問13. 中学校時代英語は好きでしたか。

1. 最初から好きだった。
2. 最初好きだったが、途中から嫌いになった。
3. 最初嫌いだったが、途中から好きになった。
4. 最初から嫌いだった。
5. 好きでも嫌いでもなかった。

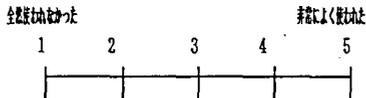
問14. (上の問13で1か3と答えた方に) 英語が好きになった主な理由は何ですか [2つ以内で選んでください] :

1. よく勉強したから
2. よく理解できたから
3. 授業が楽しかったから
4. 先生が好きだったから
5. その他

問15. (13で2か4と答えた方に) 英語が嫌いになった主な理由は何ですか [2つ以内で選んでください] :

1. よく勉強しなかったから
2. よく理解できなかったから
3. 授業が楽しくなかったから
4. 先生が嫌いだったから
5. 自分には向かない教科だから
6. その他

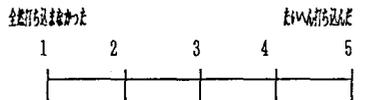
問16. 中学校の英語の授業で視聴覚機器(テープレコーダー、LL、ビデオなど)使われましたか。



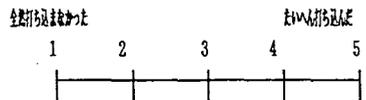
問17. (中学校のとき学校の授業以外で英語を学習した方に) どのようにして英語を学習しましたか [4つ以内で選んでください] :

1. ラジオ、テレビ、テープなどを使って
2. 塾や予備校などで
3. 家族の者、家庭教師などに
4. 参考書、問題集などを使って個人的に
5. 外国人から
6. その他

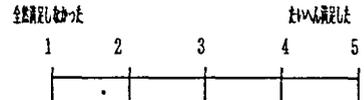
問18. 中学校時代あなたは英語の勉強にどの程度打ち込みましたか。



問19. 中学校時代あなたは全体として勉強にどの程度打ち込みましたか。



問20. 中学校時代の生活全般についてあなたはどの程度満足しましたか。



Ⅳ 高校時代について

問21. 高校時代英語は好きでしたか?

1. 最初から好きだった。
2. 最初好きだったが途中から嫌いになった。
3. 最初嫌いだったが、途中から好きになった。
4. 最初から嫌いだった。
5. 好きでも嫌いでもなかった。

問22. (問21で1か3と答えた方に) 英語が好きになった主な理由は何ですか [2つ以内で選んでください] :

1. よく勉強したから
2. よく理解できたから
3. 授業が楽しかったから
4. 先生が好きだったから
5. その他

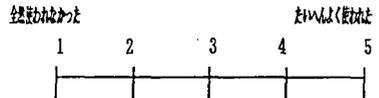
問23. (問21で2か4と答えた方に) 英語が嫌いになった主な理由は何ですか [2つ以内で選んでください] :

1. よく勉強しなかったから
2. よく理解できなかったから
3. 授業が楽しくなかったから
4. 先生が嫌いだったから
5. その他

問24. 高校のリーダーの授業では次のどれに最も重点が置かれていましたか [1つだけ選んでください] :

1. 大意把握
2. 日本語に訳す
3. 文法・構文・語法など
4. 総合的学習(聞く・話す・読む・書くなど)
5. その他()

問25. 高校の英語の授業で視聴覚機器(テープレコーダー、LL、ビデオなど)が使われましたか。



問26. 高校3年間に学校で英語の副読本は何冊くらい読みましたか。

1. 0冊
2. 1,2冊
3. 3,4冊
4. 5,6冊
5. 7冊以上

問27. (高校のとき学校の授業以外で英語を学習した方に) どのようにして英語を学習しましたか [4つ以内で選んでください] :

1. ラジオ、テレビ、テープなどを使って
2. 塾や予備校などで
3. 家族の者、家庭教師などに
4. 参考書、問題集などを使って
5. 外国人から
6. 仲間とサークルを作って
7. その他

問28. 本学の入試問題には高校で習った英語で間に合いましたか。

全然あわなかった				全然あっていた
1	2	3	4	5
----- ----- ----- -----				

問29. 高校時代あなたは英語の勉強にどの程度打ち込みましたか。

全然あわなかった				全然あっていた
1	2	3	4	5
----- ----- ----- -----				

問30. あなたは高校生活の中で、次のような活動に、どのくらい打ち込みましたか。

	全然あわなかった				全然あっていた
	1	2	3	4	5
1. 授業	----- ----- ----- -----				
2. 行事(文化祭)	----- ----- ----- -----				
3. 部活動	----- ----- ----- -----				
4. ホームルーム	----- ----- ----- -----				
5. 生徒会活動	----- ----- ----- -----				
6. 受験勉強	----- ----- ----- -----				
7. 友達とのつきあい	----- ----- ----- -----				
8. 専門的な勉強や実習	----- ----- ----- -----				

V 大学における学業と生活について

A. 英語の授業について

問31. 語学単位の修得状況について(取得した科目の番号を記入してください)

1. 英語 I
2. 英文 I
3. 英語 II
4. 英文 II
5. 独語 I
6. 独文 I
7. 仏語 I
8. 仏文 I

問32. 読解(リーディング)の授業に満足しましたか。

全然不満				全然満足
1	2	3	4	5
----- ----- ----- -----				

問33. (1年次に「聞く・話す・読解・作文」の総合的な授業を受けた方にその「総合」的な授業に満足しましたか。

全然不満				全然満足
1	2	3	4	5
----- ----- ----- -----				

問34. 英語の授業における学習量(教材の量・進度など)をどう思いましたか。

- (1) 1. 多い 2. 適当 3. 少ない

問35. 英語の授業にあなたは全体としてどのように取り組みましたか。

聴取				読取
1	2	3	4	5
----- ----- ----- -----				

問36. (問35で4か5と答えた方に)積極的に授業に取り組んだ主な理由は何ですか[2つ以内で選んでください]。

1. 英語が好きだったから
2. 英語が必要と思ったから
3. 授業がおもしろかったから
4. 先生が好きだったから
5. よい成績を取りたかったから

問37. (問35で1か2と答えた方に)消極的に授業に取り組んだ主な理由は何ですか[2つ以内で選んでください]。

1. 英語が嫌いだったから
2. 英語は必要ないと思ったから
3. 授業がつまらなかったから
4. 先生が嫌いだったから
5. 授業がわからなかったから

問38. (問37で3と答えた方に)授業がつまらなかった主な理由は何ですか[2つ以内で選んでください:]

1. 程度が高すぎたから
2. 程度が低すぎたから
3. 教材がよくなかったから
4. 教え方がよくなかったから
5. 自分の習いたいことが習えなかったから

問39. 英語の授業で、最も改善すべき点はどれですか[2つ以内で選んでください:]

1. 教材
2. 授業方法
3. クラスの人数
4. 先生の質

問40. 外国人の先生に英語を習いたいと思いますか。

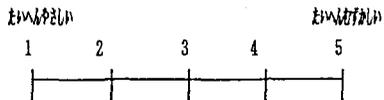
1. 習いたい
2. 習いたくない
3. どちらとも言えない

B. 英語の教材について

問41. (読解の授業を受けた方に)教材をどう思いましたか。

全然おもしろい				全然おもしろくない
1	2	3	4	5
----- ----- ----- -----				

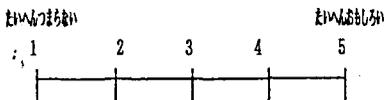
問42. (問41に答えた人)その教材の程度をどう思いましたか。



問43. '読解'の授業の教材はどのようなものがよいと思いますか [2つ以内で選んでください] :

1. 小説・物語
2. 随筆・評論
3. 詩・戯曲
4. 伝記・歴史
5. 内外の文化紹介的なもの
6. 自分の専門分野に関連するもの
7. その他 ()

問44. ('聞く・話す・読む・書く'の総合的授業を受けた方に)教材をどう思いましたか。

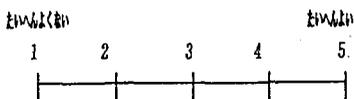


C. 視聴覚機器について

問45. 英語の授業に主としてどのような視聴覚機器を使うとよいと思いますか [2つ以内で選んでください] :

1. テープレコーダー
2. L/L
3. ビデオ、映画など
4. 実物提示装置
5. その他

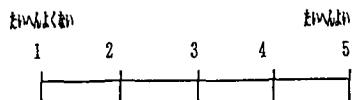
問46. (テープレコーダーを使った授業を受けた方に)その授業をどう思いましたか。



問47. (問46で1か2と答えた方に)よくないと思った主な理由は何ですか [2つ以内で選んでください]。

1. ただ聞かせるだけだから
2. 早すぎて聞き取りにくいから
3. 速度がゆっくり過ぎるから
4. 機器・設備が悪くて聞き取りにくいから
5. その他

問48. (1年次にL/Lを使った授業を受けた方に)その授業をどう思いましたか。



問49. (問48で1か2と答えた方に)よくないと思った理由は何ですか [2つ以内で選んでください] :

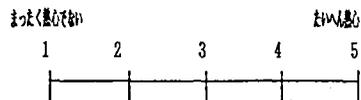
1. むずかしすぎるから
2. やさしすぎるから
3. 教材がよくないから

4. 機械操作が嫌いだから

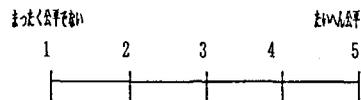
5. 機器・設備が不十分だから

D. 英語の先生について

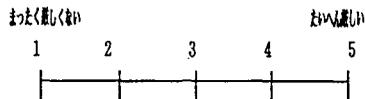
問50. (1) 熱心さについて



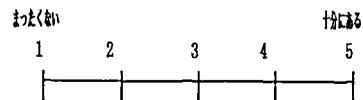
(2) 公平さについて



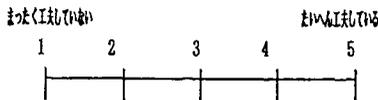
(3) 厳しさについて



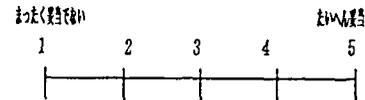
(4) 英語力について



(5) 授業の工夫について



(6) 成績評価について



VI. 大学の英語教育全般について

問51. 一般教育で英語を学ぶことは必要だと思いますか :

1. 必要
2. 不必要
3. どちらとも言えない

問52. (問51で2と答えた方に)不必要と思う主な理由は何ですか [2つ以内で選んでください] :

1. 将来必要になるとは思えないから
2. 高校までの英語力で十分だから
3. 大学で習う英語は役に立たないから
4. 専門分野の勉強に力を入れたいから
5. その他

問53. 一般教育の英語は主として何を目的としたらよいと思いますか [2つ以内で選んでください] :

1. 英語によるコミュニケーション
2. 国際人の養成
3. 教養を高めること
4. 専門教育の基礎力養成
5. その他

問54. 大学入学以来向上したと思うあなたの英語力はどれですか〔2つ以内で選んでください〕：

1. 聞く力
2. 話す力
3. 読む力
4. 書く力
5. 向上したとは思わない

問55. 大学入学以来低下したと思うあなたの英語力はどれですか〔2つ以内で選んでください〕：

1. 聞く力
2. 話す力
3. 読む力
4. 書く力
5. 低下したとは思わない

問56. 一般教育の英語ではどの技能を最も重点的に習いたいと思いますか〔1つだけ選んでください〕：

1. 聞くこと
2. 話すこと
3. 読むこと
4. 書くこと

問57. 一般教育の英語の授業の読むこと（辞書をあまり使わないで）の到達目標をどれにしたらよいと思いますか。

1. やさしい小説が読める
2. 一般の新聞や雑誌が読める
3. 専門書が読める
4. その他

問58. 大学の英語教育の大きな障害は次のどれだと思いますか〔2つ以内で選んでください〕：

1. クラスの人数が多すぎる
2. 授業方法に工夫がない
3. (聞く、話す、読む、書くなど) 習いたい技能が選べない
4. 外国人の先生に習えない
5. その他

問59. 次のような考えをどう思いますか。

(1) 英語授業の時間数は、1年次と2年次では不足なので、3年次と4年次にも英語を選択できるようにする。

1. 賛成
2. 反対
3. どちらとも言えない

(2) 英語はすべて自由選択とする。

1. 賛成
2. 反対
3. どちらとも言えない

(3) (聞く、話す、読む、書くなど) 技能別クラスわけをする。

1. 賛成
2. 反対
3. どちらとも言えない

(4) (初級、中級、上級など) 学力別クラスわけをする。

1. 賛成
2. 反対
3. どちらとも言えない

問60. 一般教育の英語のクラスの人数はどのくらいがよいと思いますか。

1. 20人以下
2. 21~30人以下
3. 31~40人以下
4. 41~50人以下
5. 51人以上

問61. 現在、大学の外国語教育は英語が中心になっていますが、将来どうするとよいと思いますか：

1. 英語だけを必修とする。
2. 英語を必修とし、他の外国語1つを選択必修とする。
3. 英語を含めて外国語のうちどれか1つを必修とする。
4. 英語を含めて外国語のうち2つを必修とする。
5. 英語を含めて外国語はすべて選択にする。

VI その他

問62. (大学入学以来、学校の英語以外で英語をならったことのある方に) 主にどこで習いましたか(習っていますか)〔2つ以内で選んでください〕：

1. E S S, 英語研究会など学内外のサークルで
2. 英語学校などで
3. 海外研修で
4. 教会で(あるいは牧師さんなどに)
5. その他

問63. (問62に答えた方に) そこで英語を習った主な理由は何ですか

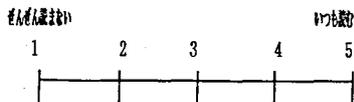
〔2つ以内で答えてください〕：

1. 大学では自分の習いたいことが習えないから
2. 大学の授業だけでは不十分だから
3. そこで習うほうが効果があがるから
4. そこで習うほうが楽しいから
5. その他

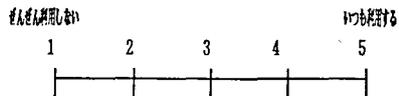
問64. (大学外で英語能力試験を受けた方に) どのような試験を受けましたか〔3つ以内で選んでください〕：

1. 英検
2. TOEFL
3. TOEIC
4. 通訳・ガイド試験
5. その他

問65. 大学の授業とは関係なしに、個人的に英語の新聞、雑誌、本などを読みますか。



問66. ラジオ、テレビなどの英語学習番組を利用していますか。



VII 英語の単位を取得できなかった学生にのみうかがいます

問67. 単位が取得できなかった直接の理由は何だと思えますか〔2つ以内で選んでください〕：

1. 成績がよくなかった。

2. 出席がよくなかった。
3. 途中で放棄して試験を受けなかった。
4. その他

問68. 単位が取得できなかった英語の授業の出席について

まじく出席しなかつた		わりと出席した		
1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

問69. 当該授業について欠席が多かった方に、その理由をうかがいます
[2つ以内で選んでください]：

1. 自分の英語力不足のため授業が理解できなかった。
2. 授業の仕方が気に入らなかった。
何かあったら具体的に書いてください。
()
3. 教員に好感が持てなかった。
何かあったら具体的に書いてください。
()
4. 生活が乱れていて、朝起きられなかった。
5. アルバイトに追われていた。
6. クラブやサークル活動に追われていた。
7. その他、何かあったら具体的に書いてください。
()

問70. 未修得の英語の単位を今年度再履修していますか。

1. している。
2. していない。

問71. (問70で2と答えた方は) その主な理由を2つ以内で選んでください。

1. 専門の勉強が忙しいため
2. 登録手続きを怠ったため
3. アルバイトに追われているため
4. クラブ、サークル活動に追われているため
5. その他
何かあったら具体的に書いてください。
()

Ⅹ 大学生生活全般について

問72. 現在の大学生生活の中で、あなたは次のような活動にどのくらい打ち込んでいますか。あてはまる番号を記入してください。

1. 専門科目の講義や勉強

ほんの少しだけ		わりと打ち込んでる		
1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

2. ゼミナールなど

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

3. 実習

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

4. 一般教養の授業や勉強

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

5. 第2外国語(独語または仏語)の勉強

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

6. 資格取得のための勉強

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

7. クラブ・サークル・同好会など

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

8. 自治的活動(自治会・大学祭実行委員会・生協など)

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

9. 友達とのつきあい

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

10. アルバイト

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

11. ボランティア活動など

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

12. 自分の趣味

1	2	3	4
----- ----- ----- -----			

13. 就職の準備(就職試験のための勉強を含む)

1	2	3	4	5
----- ----- ----- ----- -----				

問73. これまでのあなたの修得単位数はいくつですか。

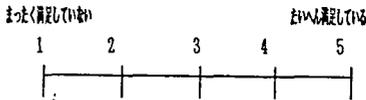
- | | | | |
|-----------|------------|-------------|-------------|
| 01. 0~10 | 02. 11~20 | 03. 21~30 | 04. 31~40 |
| 05. 41~50 | 06. 51~60 | 07. 61~70 | 08. 71~80 |
| 09. 81~90 | 10. 91~100 | 11. 101~110 | 12. 111~120 |
| 13. 121~ | | | |

問74. 現在学んでいる専門課程について、どう感じていますか(該当するものを選んでください)。

1. 自分の性格に向いている
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
2. 興味や関心をそそられている
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
3. 自分の能力にあっている
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
4. 将来つきたい職業に結びついている
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
5. 高校時代からの得意な教科を生かせる
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない

6. 将来の生き方と結びついている
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
7. この専門は将来性がある
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
8. この専門を続ける自信がある
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
9. もっと広く学びたい
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
10. もっと深く学びたい
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
11. この専門を学ぶことに誇りが感じられる
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
12. 学んでいて充実感が感じられる
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない
13. 選び直せるなら他の課程(学科)にかわりたい
 1. はい
 2. いいえ
 3. わからない

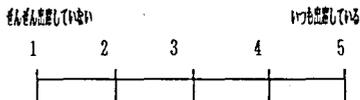
問75. あなたは、現在の大学生活に満足していますか。



問76. (問75で1か2と答えた方に)それはどんな理由で不満ですか。主なものを2つ以内で選んでください。

1. 設備や施設が十分でないから
2. よい友人に恵まれないから
3. よい先生に恵まれないから
4. 授業の仕方が気に入らないから
5. 授業科目が気に入らないから
6. 進学や就職の指導が適切でないから
7. アルバイトで授業に出席できないから
8. クラブやサークル活動に問題があるから
9. その他

問77. あなたの基礎ゼミの出席状況はどうでしたか(現在受講中のものを含む)。



問78. あなたは入門ゼミおよび専門ゼミを合わせてこれまでいくつ受講しましたか(現在受講中のものも含む)。

1. 0
2. 1つ
3. 2つ
4. 3つ以上

問79. あなたが講義期間、大学へ登校するのは1週間に何日くらいですか。

1. 6日
2. 5日
3. 4日
4. 3日
5. 2日
6. 1日
7. 全く登校しないことが多い。

問80. あなたの授業への出席率ほどの程度ですか。

1. 9割以上

2. 7~8割
3. 5~6割
4. 3~4割
5. 1~2割
6. 全くといっていいほど出席しない。

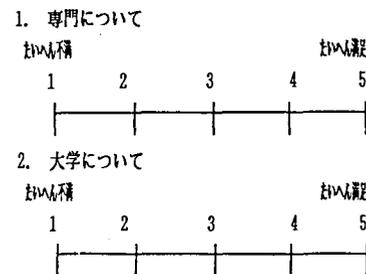
問81. あなたは、自分の能力の足りなさを考えて、やりたいと思うことをあきらめることがありますか。

1. 全くその通りである。
2. どちらかといえばそうである。
3. そんなことはない。
4. わからない。

問82. あなたは、努力さえすればもっと勉強できると思っていますか。

1. 全くその通りである。
2. どちらかといえばそうである。
3. そんなことはない。
4. わからない。

問83. この大学・専門を選んだことについて全体として満足していますか。

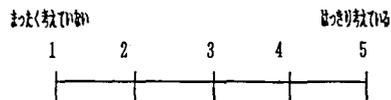


問84. 大学卒業後の進路についてどう考えていますか(1つだけ選んでください)。

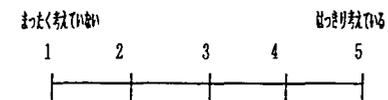
1. 大学院に進む。
2. 一般企業に就職する(サラリーマンなど、公務員一般職を含む)。
3. 大学で学んだことが生かせる専門職に就く。
4. 家業を継ぐ。
5. 家事手伝い。
6. その他
7. まだ決めていない。

問85. 就職を考えている方にかがいます(大学院進学の方は、大学院卒業後について)。以下のことについて、現在どのぐらい考えていますか。

1. 仕事の内容(職種)について



2. 企業(国や自治体などを含む)の種類や企業名など



ご協力ありがとうございました。